

Z32-B88

島崎藤村、友島生馬、監修

# 金の船

三月号



第三卷 第三号

国立国会

8. 3. 26

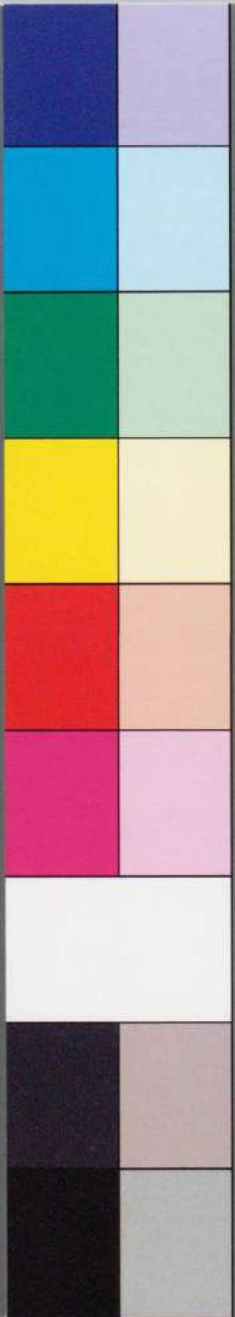
図書館

inches  
1 2 3 4 5 6 7 8  
cm  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

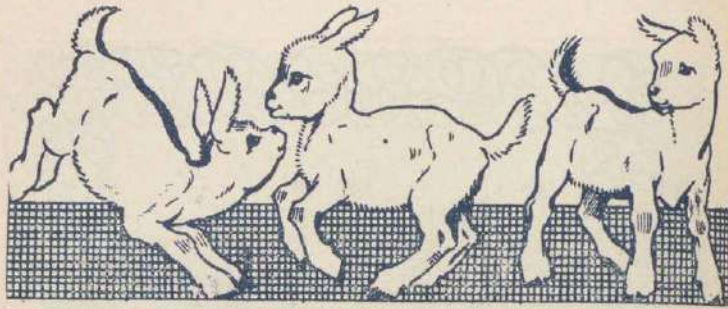
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19





「金の船」三月號 第二卷第三號

- 春が来た(表紙、石版刷)..... 岡本歸一
- 蓮華の湖(口輪、三色版)..... 本居長世
- 葱坊主(曲譜)..... 野口雨情
- 四丁目の犬(童話)..... 有島生馬
- 秀太さんの犬(童話)..... 三前田晃
- 金槌の音(童話)..... 若山牧水
- 春の雨(童話)..... 鈴木善太郎
- 狸の高軒(童話)..... 沖野岩三郎
- 山六爺さん(童話)..... 齋藤佐次郎
- 鴛鳥の王様(童話)..... 茅野雅子
- 春風のうた(童話)..... 横山壽篁
- 烽火(童話).....



- 蟹満寺の出来た譚(童話)..... 長田秀雄
- 一生不平を言った豚の話(童話)..... 青木茂
- 瑞嚴寺の和尚(童話)..... 三島章道
- 水の底(童話)..... 井本龍鷹
- 蛙(童話)..... 齋藤佐次郎
- 葱坊主(童話)..... 野口雨情
- 小人の森(童話)..... 橋逸雄
- いやしんぼ鳥(童話)..... 野口雨情
- 靴(幼年詩)..... 若山牧水
- ばくろさん(綴方).....
- 停車場(自由畫)..... 山本鼎選
- 通信.....
- 挿繪..... 岡本歸一
- 製版..... 田中松太郎



### 蓮華の湖

鶯鳥の王様は大怪我をしてゐるので、動く事も出来ませんでした。それを見た獵人は、王様を抱いて蓮華湖の縁へ行きました。そして、大きな木の葉を拾つて、それで湖の水をすくつては、幾度もく傷ついた足を洗ひました。黄金色の羽についた血まで拭ひました。

獵人は長い間をうしてゐました。(鶯鳥の王様 第三十九頁)

フ イ タ  
ふ い た  
さ ゐ い な

最後×印 = ツマア





船の金

号 三 第 卷 三 第

葱坊主

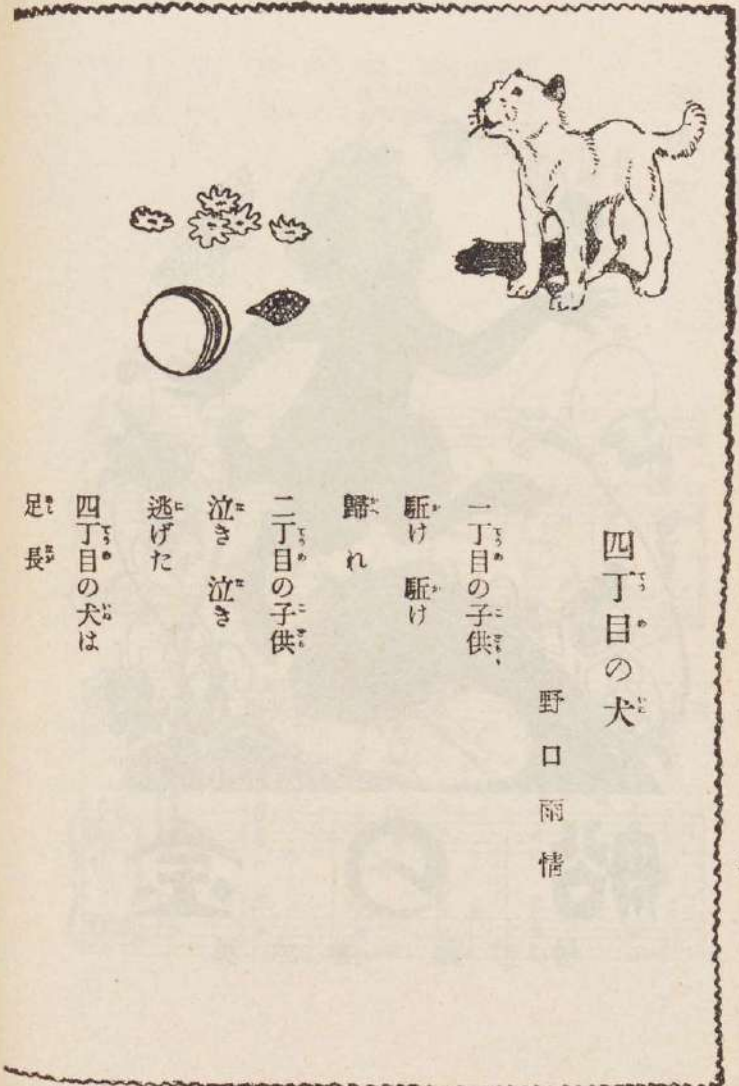
作曲 本居長世  
作歌 野口雨情

びゅうびゅう風が  
山から  
吹いた  
昨日も今日も  
煙に  
吹いた  
煙の中  
葱坊主  
寒いな





犬だ  
 三丁目の角に  
 此方向いて  
 居たぞ



一丁目の子供  
 駈け 駈け  
 歸れ  
 二丁目の子供  
 泣き 泣き  
 逃げた  
 四丁目の犬は  
 足長

四丁目の犬

野口雨情

# 秀太さんの犬 (つとま)

有島生馬

四



「君、僕それを貰つて行つてもいい？」  
と秀太さんは、黒い小犬の頸筋を持つて吊しあげやうとしましたが、中々重くつて片手では持ち上りませんでした。

「君重いでせう。」と正夫さんは笑ひながら答へて、「それがよければ、それ上げるぜ。僕はこの赤の班をとつて置くんだから、こいつが一番茶目でよくふざけて面白いなだもの……。カリイノつて名をつけたのもと同じ名の可愛らしい犬が家にゐたけれどもいつか往來で荷車にひき殺されて終つたんだから。でもどうして君それを連れて行く積り？」  
と正夫さんは秀太さんの顔を覗き込みました。

「僕これだ。」

さう云ひながら秀太さんは懐中を探して、何かとり出しました。

「それで。」  
と正夫さんは果れたやうな顔付をして秀太さんに云ひました。

「君、それではまるで菓子でも買つて歸るやうだね。」

と國三さんも吹き出して笑ひました。見れば秀太さんは、懐中から綺麗な花模様のある風呂敷を出して、ひろげて見せておました。

「い、ぜこの中に包んで下げて行けば。犬が道を覚えてゐると直ぐ歸つて終ふつて云ふから。」

「さうかね、君。」

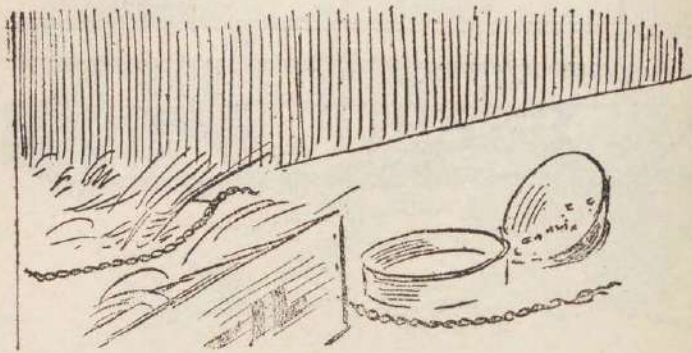
と正夫さんも感心して、三人で黒い小犬の風呂敷包を作らうとしましたけれども、菓子とは異つて手を出したり、脚を出したり、折角包んだ顔造無理に包の中から外に出して、何をされるのかといふやうにさよろ／＼三人を見廻してゐました。でも嚙付かれもせず、やつと黒犬の風呂敷包を作つて秀太さんが下げてみると、中々片手では持てません。と云つて両手では歩きにくくて仕方がありません。

「君重いの、どら僕に持たせてみ給へ。」さう云つて國三さんが試に持つてみました。が、やつぱり重くつて家まで持つて行けさうではありませんでした。二人は正夫さんから竹の棒を一本貰つて、黒犬の風呂敷包をその竹の棒の真中にぶら下げ、兩方の端を二人で、持つてよた／＼お家の方へ歸つて行きました。往來の人は何を持つて行くんだらうと、皆んな二人の方を振り返つてみました。さうして風呂敷包の中か



五



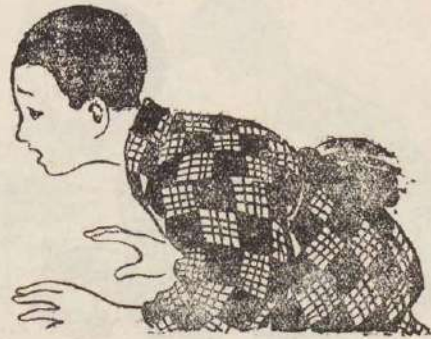


つて鳴いてゐる聲が聞えます。黒は生れた家の事や、お母さんの事や、兄弟達の事を思つて泣いてゐるのだなと思ふと、秀太さんは欲しいには欲しいが、黒一疋だけ連れて来たのも可哀相だったと考へたりしました。そのうちいつの間にかねて終ひました。

明る日の朝、秀太さんはお母様から、

「秀太さん、さあ七時ですよ起きなさい。あなたの大切な黒が夜中のうちに、どこかへ行つてゐなくなつて終ひましたよ。」つて起されたので、びつくりして床の中から飛び起きました。そうして直ぐ裏所裏の黒の寐床の處へ馳け付けてみました。お母様のあつしやつた通り黒の姿は見えませんが、喰べ残しのご飯の入つたお椀と水を入れた小さな金盃の外には、ゆはえて置いた麻繩の半分は噛み切られたのが、そこに残つてゐた許りでした。どんなに秀太さんは悲しかったか分りません。

黒はなぜ逃げたのだらう、どこへ行つて終つたのだらうと思つて、直ぐ探しにでも行きたかつたのですが、學校の始まる時間になりますから、さうはしてゐられません。學校へ行く途々も方々の露路を覗き込んだりして、犬許り氣にしながら歩いて行きますと、又いつもより澤山の犬が秀太さんの目にとまりました。けれども黒らしい犬は一疋



ら、震へながら呻つてゐる小犬の鳴聲が聞えると、あゝさうか、犬の子が入つてゐるのかといふやうに笑ひ顔をして行き過ぎました。秀太さんの家へ着いた時は、二人とも手が抜けさうに疲れました。

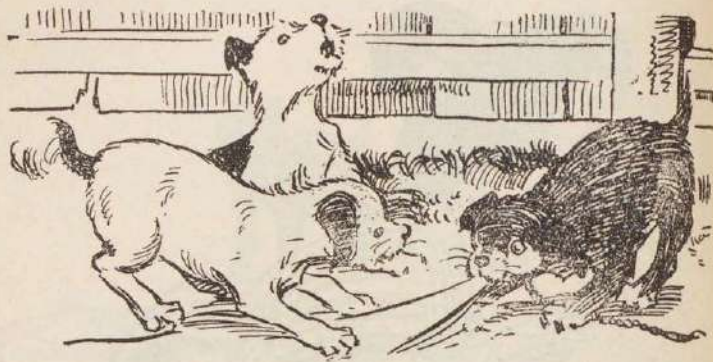
二

秀太さんと國三さんは黒犬にご膳を喰べさせたり、寐床を作つてやつたり、夢中になつてまご／＼してゐるうちに日が暮れて終ひました。國三さんはお家へ歸つて行きます。秀太さんもご膳をたべなければなりませんから家へ上つて来ると、黒は一人て淋しがつて、裏所の方でくん／＼云つて鳴いてゐる聲がお座敷まで聞えます。秀太さんは一口ご飯をたべてはその鳴聲に耳を傾け、一口お汁を吸つては又黒の事を思ひましたから、ご膳はお腹の中で、どこへ行つたらいくか分らないで、まごまごしてゐました。

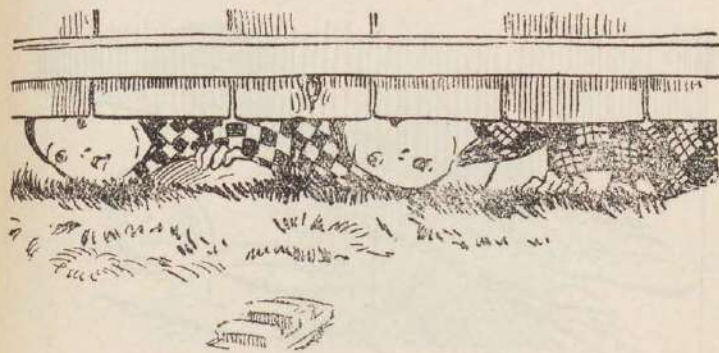
夜になつてもう寐る頃になりましたから、いつまでも黒のそばにゐてやる事は出来ません。

「黒や、左様なら、ねんねおしよ。」

と云つてお部屋の方へねに行きました。枕に頭を付けても黒の事が心配でたまりません。變つてもお部屋をへだてた遠くの方で黒の淋しが



と秀太さんも、敵打ちにでも出たやうな心地がして来て、手に持つてゐた竹の棒切れをぐる／＼と振り廻しました。國三さんも、この悪魔大王奴、つて往來の脇に立つてゐる捨石の頭をぼか／＼なぐりました。なぐられた石こそいゝ迷惑ではありませんか。又暫らく行くと「君どうしたんだらう黒は。」  
つて秀太さんが少し悲し相な聲を出しました。  
「捕虜になつたかな。」  
と國三さんは今度答へました。  
「捕虜になつたとすればどこだらう。僕はやつぱり正夫さんのお家へ歸つて終つたんではないかと思ふんだよ。」  
と秀太さんは云ひました。  
「さうかも知れない。では行つて聞いてみやうか、でも何んだか恥かしいな、昨日も行つて、又今日も行くのほ。」  
「かうね。」  
と流石の探險家達もそれには少し情氣で終ひました。いかに恥かしくつても、いかに面目がなくなつても、矢張り二人は正夫さんの玄關に行つて兜の代りに帽子を脱いで、もう一度「犬下さいな、犬下さいな。」と大きな聲で云はなければならなくなりました。なぜならば正夫さん



もひませんでした。  
學校でも黒の事許り考へ出してゐました。國三さんにも早速その話をしますと、元氣のいゝ國三さんは、では學校が引けたら一つ「探險」に出かけやう、さつとどこかに隠れてゐるぜと云つて慰めて呉れました。

三

學校が引けて家へ歸ると直ぐ、秀太國三、二人の探險家は「黒」といふ寶物を探しに出かけました。劍の代りに竹の棒切れを持ち、路金の代りにビスケットの入つた袋を腰にさげ、ピストルの代りに麻繩を巻めて懐中に押し込んで、さも勇ましく探險の旅に出かけました。  
谷のやうな狭い露路の奥、虐つ子のゐる敵國のやうな表通り、阪の上の山、下水の石橋の下の洞、毒氣の吹出してゐる掃溜のかけ、艱難辛苦して方々探し廻りましたが、「寶物」は中々見付かりません。  
「君どうしたんだらう黒は。」  
と秀太さんは少し探し疲ひれて、國三さんに問ひかけました。  
「やられたかな、とう／＼悪魔大王に、悪魔大王つてね君、犬殺しの事だぜ、いゝ？」  
「うん悪魔大王にやられたかな、残念！」



家の裏の塀の下から二人の斥候がそつと覗いてみると、どうせう、日本一の「寶物」は白や赤班と一緒になつてさも楽しさうにびやれて遊んでゐるではありませんか。探險家、敵打、斥候、そんな事には強い二人の勇者もほと／＼閉口して終ひました。

四

やつと黒を貰つて連れ歸つた秀太さんは、その晩そつと見付からないうらに自分のお床の中に黒を隠してねました。暖いのと淋しくないのとで黒は大喜びで秀太さんの鼻をなめたり、秀太さんの腕を枕にしたりしてゐましたが、秀太さんがね付いた頃には黒もすや／＼とねて終ひました。秀太さんは何んだか一晚中眠苦しい思をしました。

「秀太さん、さあ七時ですよお起きなさい。」

いつもの通りお母様がお起しにいらつしやいました。

「あら秀太さん！」

お母様は秀太さんのお床の中に何んだか譯の分らない黒いものが動くのを見てびつくりして大きな聲をお出しになりました。秀太さんはしまつたと思つたので、直ぐお腹の下の方へ無理に黒を押し込んで隠さうとしました。すると今度は黒の方がびつくりして急にわん／＼

んと思苦しさうな聲で鳴きました。

「あら嫌な秀太さん、そんな處に黒を入れてねかしたの？ あきれた方ね。」

お母様はさう云つて無理に黒を秀太さんの床から引ぶり出しました。黒は丸い目をして人間同志の喧嘩を見て、何んだらうと云つてゐるやうな顔をしました。

「お母様僕昨晚一晚眠苦しかつたの、まるで麻疹の時みたやうに身體中が痒いかつた。」

「さうでせうとも、黒なんかと一緒にねるんですもの、どらお見せなさい、きつと蚤に喰べられたんでせう、仕方ない人ね。」

秀太さんが寝巻を脱いで裸になると痒苦しかつた筈です。身體中眞赤になるほど方々蚤にさへられて腫れ上つてゐました。

秀太さんはお母様に散々小言を言はれて、始めて犬は人間や猫のやうにお家の中でねるものでない譯が分りました。その代り鎖をお母様が一本買つて下さいましたから、黒がいくら逃げ歸らうと思つてももう歸れなくなりました。

三四日するうちには、その鎖も入らない位黒は秀太さんにも秀太さんのお家にもなれて、忠義な犬になりました。(つづく)





## 金槌の音

前田 晁

「ちんかん、ちんかん、——ちんかん、ちんかん」と道端に坐つて石を割つてゐる爺さんの金槌が言つてゐました。「ちんかん、ちんかん、——ちんかん、ちんかん。」

爺さんは八方に飛びはねる石のかけらが、目にはいるのを避ける爲めに大きな眼鏡をかけてゐました。ずぶんもう年を取つて、瘦せこけて、頬べたなどもすつかりこけて、至くみじめな様子を

してゐました。

と其處へ、不意に自動車がぶらぶらと道の角を曲つて来て、爺さんにはつと砂埃を浴せながら、まっしぐらに駆けて行きました。

「あゝ！」と爺さんは溜息をつきました。

「何といふ不公平な事だ！何だつて世の中には、あんなにお金があつて仕合せな者もあるのに、一方にはまた、こんな貧乏で不仕合せな者があつたのだ？ あすこのあんな家を見るが、いゝと

を埃だらけにして行きました。

かうして朝がだん／＼と過ぎました。そして午近くにになると、其の道を小さな女の子が、——ばら

爺さんは直ぐ向うに見える美しい庭園に囲まれた地主の立派な家の方へ面を向けて「そしてあれを  
おれの汚い家と比べて見ろ。」

かう獨り言を

言つて爺さんは  
またもや深い溜  
息を一つつきま  
した。

「ちんかん、ち  
んかん、——ち  
んかん、ちんか  
ん」と金槌はま  
た歌ひ出しまし  
た。其うちにま  
た別の自動車  
がぶらぶらとや  
つて来て、先より  
ももつと爺さん



色の頬をした可愛い小さな女の子が、はれはれと  
した目を輝かしながらやって来ました。  
「おぢいさん、お辨當を持つて来ましたよ」と小  
さな女の子は、にこ／＼しながら言ひました。「お  
かあさんがね、今日はおぢいさんの好きな海苔巻  
をどつさりこしらへたんだつて。」

「さうかい、それは有難う、」と爺さんもまた、其  
の哀れに老いた顔の上に輝くやうな微笑を浮べな  
がら言ひました。「其處の石の上においておきな。」  
「はい、」と女の子は爺さんの言つた通りにすると  
「おかあさんがね、それやア忙しいんだつて。だ  
から、わたし歸つてよ。」

さう言つて女の子はとつと家の方へ駆けて行  
きました。

と間もなく、其の道の上に、背の高い一人の若  
い男が、まだ小さな女の子を背負つて出て来まし  
た。其の人は爺さんのそばの、石の澤山積んであ  
る處まで来ると、女の子を静かにさろして、自分

「えい。この子は空いてゐる  
でせう、」と若い男は答へま  
した。

「それは可哀相に、」と  
爺さんはしみ／＼とし  
た聲で言つて、辨當  
の包を開きながら、  
「さあ、わしの辨當  
を分けて上げよう。  
お前さんもおあがりな  
よ。」

「有難う。」

若い男は一つおじぎをする  
と海苔巻を取つて女の子にやつ  
たり、自分も遠慮なく食べたらし  
ました。それは本當においしい御馳  
走でした。腹のへつてゐた若い男と女の子とはど  
んなに喜んだか知れませぬ。



もそばへ腰をかけました。其の人は大層貧しいな  
りをしてゐましたが、女の子は小綺麗で小ざつぱ  
りしてゐました。

「お前さん、草臥れてゐるやうだね?」と爺さん  
は聲をかけた。

「えい、」と其の人は答へました。「幾里も歩いて来  
たものですから。」

「遠くへ行くんかね?」

「なあに」と其の人は疲れた肩を上げ下げしなが  
ら、「何處といつて當てがある譯ぢやありません。

わたしには此の——此の小さな妹の外に何にもな  
いんですから。」さう言つて、  
其の人は瘦せた指で女の子の柔らかな髪の毛を撫  
でました。

爺さんはちつとその人を見てゐましたが、やが  
て気がついたやうに、

「失禮だが、お前さん、おなかが空いてはゐるん  
かね?」

「御馳走さまで  
した、」と若い男  
は食べてしまふ  
とお禮を言ひま  
した。

「わしはまた、  
お前さん達と分  
けて食べたので  
餘計に旨かつた  
よ。」

爺さんはにこ  
にこしながらさ  
う言つて、金槌  
を持つて立ちあ  
がりました。

「おぢいさんは  
石を割つて暮らしてゐるんですね。」と若い男は言  
ひました。「わたしにはさういふ事も出来ないの



すよ。これでも大學を卒業して免状は取つたんですがね。其の日のバンをさへ稼ぐことが出来ないのですよ。」

「なあにお前さん、」と爺さんは言ひました。「辛抱さへしてゐなされあ、其のうちに運が向いて來まはさあ。庭度運が向いて來まはさあ。」

すよ。ちや左様なら。またお目に懸りませう。」  
さう言つて若い男が行つてしまふと、後にはまた「ちんかん、ちんかん、——ちんかん、ちんかん、」といふ金槌の音が、麗らかに晴れた空に響いて、いつまでも氣持よく聞えてゐました。

二

地主の家では、其の書齋に地主が坐つてゐました。机に肘を突いて、顔を両手の中に埋めて——其の様子は何かにはどく屈託してゐるやうに見えました。

地主は、實は、大層氣の毒な身の上でした。といふのは、本當は金持でなかつたからです。いかにも澤山の土地は持つてゐましたが、一方に負債がどつさりありました。其の美しい立派な家も屋敷も、みんな人手に渡さなければならぬほどの借金がありました。そして其の借金の爲めに、地主も其の子供達も、間もなく一文無しにならな

其の時、若い男は足許にあつた一つの石を拾ひ上げました。そして其の重みを手で量つて、右見左見してゐましたが、また別の石を拾つて同じことをしました。そして爺さんが不思議さうにしてゐる中で幾つかをかくしに入れました。

「おちいさん、この石は何處から持つて來たのだね？」とやがて若い男は訊きました。

「あすこの、あの地主さんの處からだよ、」と爺さんは言つて、向うに見える立派な地主の家を指さしました。

「どんな人ですね、その地主さんといふのは？」  
「それは善い人でさあ。此處いらぢうのみんなの者に好かれてゐなされあ。だが大變な金持だからね、本當にどんな人かといふことは分らねえだよ。」

若い男は立ち上つて女の子をまた背負ひました。「おちいさん、大變な世話になりました。有難う、わたしはこれからあの地主さんの所へ行つて見ま

ければならないやうな御目になつて居りました。  
「あゝ！」と地主はやがて深い溜息をつきました。  
「もしわたしがただの貧しい百姓であつたなら、でなければ、其の日暮らしの石切つてもあつたら、もつと仕合せであつたらうに。こんな心配や屈託はしなくとも濟んだらうに。何という情ない事だらう！」

と、其處へ女中がしとやかにいつて來ました。そして、「見かけぬ若い男の方が、何か重大な用事でお目に懸りたいと申して居りますが、……」と言ひました。

「どんな人かい？」と主人は訊き返しました。  
「ひどく見すばらしい風をして居りますが、可愛い女の子さんを連れててございます。用向は、御主人にお目に懸つた上で申上げる！ またお目に懸らないうちは、どうしても歸らないなどと申して居ります。」

地主はちらと眉を曇らして、ためらふやうに考

へてゐましたが、やがて「お通しなさい」と言ひました。直ぐに若い男が、小さな妹をつれて其の部屋へはいつて來ました。

「突然お訪ねした失禮はお許し下さい、」と若い男は一つおじぎをいたしました。「しかし、わたしは物乞に參たのではありません。見かけは御覽の通りですが、……」

「いや、見かけは一切のものではありません、」と地主は答へました。「わたしも腹藏のない所をお話ししますが、實は、わたしはあなたよりももつと貧乏なのです。わたしは一文無してあるばかりか、其の上に澤山の借金を持つて居ります。明日になつて御覽なさい。世間はわたしがどんなに零落した哀れな人間であるかを知るのでせうから。」

「いや、そんな事は恐らくありません。あなたはあすこの道をお直しになつておいでせう?」  
「それはさうですがしかし、わたしは實際……」  
「ちよつと、お待ち下さい、」と若い男はあわてて

いてゐる藪の小山のがへ行つて見たり石切場へ行つて見たりしました。二日後に、有名な其の道の専門家が呼ばれて鑑定にやつて來ました。若い男の言つたことは本當でした。何もかも本當でした。地主は俄に其の國での一番のお金持になりました。地主はまるで夢のやうな氣持がしながら、早速大きな事務所を置いてどしどし鑛石を掘り出すことにいたしました。

「で、あなたは、」と地主は若い男に言ひました。「わたしのこの事業の技師長になつて呉れませんか。一切を委任しますから。」「承知しました。若い男は幸福に輝いた目をしてかう答へま



「ちんかん、ちんかん、ちんかん——、」と歌ふ金槌の歌を懐しく聞いたか知れませんでした。(をばり)

主人の言葉を遮つて「あの道普請に使つておいての石は、あなたのお庭から取られたのだと伺ひましたが、さうですか?」

「さうです、」と地主は頷きました。  
「御主人、」と若い男は俄に力を籠めた聲で叫んで「あなたは大變な財産をお持ちです。あなたは其の財産で道を直してゐられるのです。私は今、あの石切場に居てあの石が、非常に値打のある鑛石であることを發見しました。もし私のこの考へが正しければあなたは大變なお金持です。」

若い男はさつき道端の石切場から取つて來た石をふところから出して、「これを御覽なさい、」と地主の前に置きました。そして自分が其の石に就いて知つてゐる事、感じてゐる事を細々と説明しました。大學を卒業して免狀を持つてゐるといふ事も話しました。地主は半信半疑で聞いてゐましたが、次第に顔かすにはゐられなくなりました。一時雨後に、二人は石を取つた庭からそれに續

した。そして小さな妹を抱いて、帰せしめました。石切の爺さんは工夫長に取り立てられました。そしてみんな大層仕合せになりました。それといふのも、爺さんがあつた時、見ず知らずの若い男の人を深切にしてやつて、辨當を分けてやつたりしたのが、みんなにこの幸福を持つて來るもとなつたのでした。爺さんはいつまでもそれを忘れない爲めに、其の家の座敷の壁に、あの時の金槌をちやんとかけておきました。爺さんは、其の後幾度か夢の中で、



果がま<sup>ア</sup>るく光つた。  
 光つたと思つたら  
 さらさらさらりと落つこつた。  
 落つこつたと思つたら  
 またひいとつ生れた。  
 木の芽、木の芽  
 木の芽のめぐりに雨が降る。



春の雨

若山牧水

木の芽がふくらんだ  
 窓のさ<sup>ア</sup>きの木の芽。  
 木の芽のさ<sup>ア</sup>きに  
 雫がひいとつ生れた。  
 う<sup>マ</sup>ま<sup>ア</sup>れたし<sup>イ</sup>果





# 狸の高鼻

鈴木善太郎

「わかし、わかし、花子さんといふ可愛いらしい子がありません。

「お嬢さん、お嬢さん。私の大好きのお嬢さん。私今度お嬢さんの何でも好きな物を御馳走して上ますわ」とある時花子さんが云ひました。

「それは御馳走様ですね」

とお嬢さんはニツコリして云ひました。

「お嬢さんは何がお好き？」

と花子さんが云ひますと、

と甘酒を振らへていたよいて、牡丹餅は重箱に、甘酒は瓶に詰めて、それを持って家を出ました。

お嬢さんの家は、五六丁離れた處にありました。途中には川があつて、土橋がかゝつてゐました。その先きが竹藪になつてゐました。

花子さんが土橋の上まで来ますと、向うの竹藪の中から狸がチヨコ〜と出て来ました。

「あら、狸よ。でも私恐くないわ」

と花子さんは思ひました。

狸は花子さんの前に立止つて、大きなお腹を両手でポンポンと叩きました。すると、まるで鼓のやうな音がしました。花子さんはをかしくなりました。そして笑ひました。

狸も笑ひました。それから

「花子さん、今日は」と云ひました。

「はい、今日は」

と花子さんも云ひました。

「花子さん、今日は大分おめかしですね」

と狸が云ひました。

「でも私今日はお嬢さんとこへ行くんですもの」

「さうさね、私は牡丹餅がいゝね」

「それから？」

「それからかい、さうさ、まア甘酒なども悪くはないね」とお嬢さんが云ひました。

「ぢやア私今にお嬢さんとこへ牡丹餅と甘酒を持って来て上げるわ。楽しみにして待つてらつしやいよ」

と花子さんは約束しました。

## 二

それから二三日経ちますと、花子さんはお嬢さんに牡丹餅

と花子さんは獨りが歸さうに云ひました。

「あゝさうですか。それであなたは風呂敷包を抱へてらつしやるんですね。その中には、何ぞ御馳走でも入つてゐるんですか」

と狸はじろ〜と風呂敷包に眼を附けて云ひました。

「えゝ、お嬢さんの大好きな、大好きな、牡丹餅と甘酒なのよ」

「さうですか。それはお嬢さんが定めしお喜びでせう。時にお嬢さんは何處にいらつしやるんですか」

と狸が云ひました。

「竹藪の向うの、原の向うの、栗林の向うの」

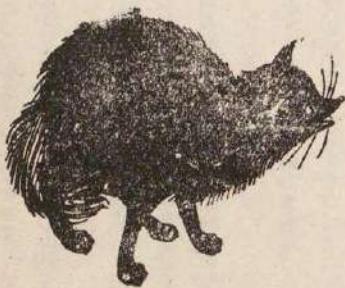
一軒家よ。お爺さんは毎日山へ柴刈りに行つてらつしやるから、晝

の間はお嬢さんお一人

なの」

と花子さんはすつかり

話して聞かせました。



そしてお嬢さんが、今日あたり花子さんの行くのを、吃度待つてらつしやるだらうと思ひましたので、花子さんは大急ぎで歩き出しました。

### 三

「花子さん、あなたは大変お急ぎですね。まるで學校へ行く時のやうですね。それよりもこの雨の竹藪を御覽なさいよ。竹の子がどつさりあるでせう。お嬢さんのお土産に竹の子を少し取つて行つてお上げなさいよ」と狸は花子さんの後について来て云ひました。

花子さんは狸が悪いたくらみをしてゐるとは気が付きませんから、竹藪の中へ入つて竹の子を取り始めました。する中に狸は、大急ぎでお嬢さんの家へ行きまして、「お嬢さん、お嬢さん、私花子よ。お嬢さんの大好きな牡丹餅と甘酒を持つて来ましたよ」と云ひました。

お嬢さんは狸が花子さんに化けてゐる事に気が付きませんでしたから、喜んで御馳走を食べようとする、狸は俄かにお嬢さんに飛びついて、頭からお嬢さんを一呑みに呑んで了ひました。

「いやにね」とお嬢さんが云ひました。

「お嬢さん、お嬢さん。お嬢さんの口は大變大變大きいんですね」と花子さんは云ひました。

「はい、お前を一呑みにして了へるやうにね」とお嬢さんが云ひました。そして直様花子さんを一口に頭から呑んで了ひました。狸はお腹がくちくちくなつて、今度はほんたうに睡くなりました。そこでグウ／＼高軒をかいて、爐端に寝込んで了ひました。

そこへ柴刈りに行つたお嬢さんが、山から歸つて来ました。見ると、いつもゐる管のお嬢さんはゐないで、狸が寝てゐました。これは吃度狸がお嬢さんを食へたに違ひないと思ひました。お嬢さんはお嬢さんの髻を取つてやらうと草刈鎌で狸の大きなお腹を真中から二つに割きました。したら中からお嬢さんと花子さんが出て来ました。



### 二四

花子さんはそんな事が起つた事は少しも知りませんでした。兩手に持てる丈け竹の子を取つて、お嬢さんの家へ行きました。

「お嬢さん、今日は。私花子よ」と花子さんは門口から聲を掛けて入りました。然しお嬢さんの返事がありませんでした。それはその筈です。お嬢さんに化けた狸は爐端に坐り込んだなりで、狸寝入りをしてゐました。

「お嬢さん、お嬢さん」と花子さんが呼び起しました。「はい、はい」とお嬢さんが始めて答へました。

### 四

「お嬢さん、お嬢さん。お嬢さんのお腹は大變大きいわ」と花子さんは云ひました。

「はい、今日はお腹を大きくして待つてゐましたよ。お前さんの持つて来た御馳走が、どつさり食へられるやうにね」とお嬢さんが云ひました。

「お嬢さん、お嬢さん。お嬢さんのお尻に尻尾があるのね」と花子さんは云ひました。「いえ、これは私の尻ですよ。竹藪に敷居つても髭はな

「あ、狸のお腹の中は暗かつた事ね」とお嬢さんが云ひました。

「狸のお腹の中は息苦しかつたわ」と花子さんが云ひました。

「憎い狸めどうしてくれよう」とお嬢さんが云ひました。花子さんは小石を澤山拾つて来て、それを狸のお腹に詰め込みました。

「狸め、ごまア見ろ」とお嬢さんが手を叩いてはやしました。その音に狸は目を覺ました。そして大變驚いて、逃げ出さうとしましたが、お腹が重ので起る事が出来ませんでした。それでも無理に起きようとしたので、ステンコロリンと爐の中に轉で、狸はたうとう焼け死て了りました。

お嬢さんとお嬢さんは、花子さんの持つて来た牡丹餅を食べたり、甘酒を飲んだりして喜びました。(をばり)



## 山六爺さん

(長篇童話)

沖野岩三郎

二六

山六爺さんの家は、山の奥の奥の、淋しい一軒家でありました。家内は爺さんと婆アさんと、たつた二人ツきりて、婆アさんは毎日、家に居て藤布を織つてゐました。爺さんは毎朝早くから「クロ」といふ犬を伴つて、山へ獵に行きました。

冬の寒い日でありました。山六爺さんは、いつものやうに、クロを伴つて、裏の山をズン／＼と奥へ奥へと登つて行きました。そして廿町ばかりも來たと思ふ頃、クロは急にクン／＼と鼻を鳴らし初めて、矢のやうに右手の草原へ駆け込みました。「猪か、鹿か……」と呟き乍ら山六爺さんは直ぐ火繩に火をつけて、犬の行つた方へ走つて行きますと、前方の大きな樫の樹

の下で、クロが何だか知らないが茶色な物をくはへて、一生懸命に引摺つて居るのが見えました。

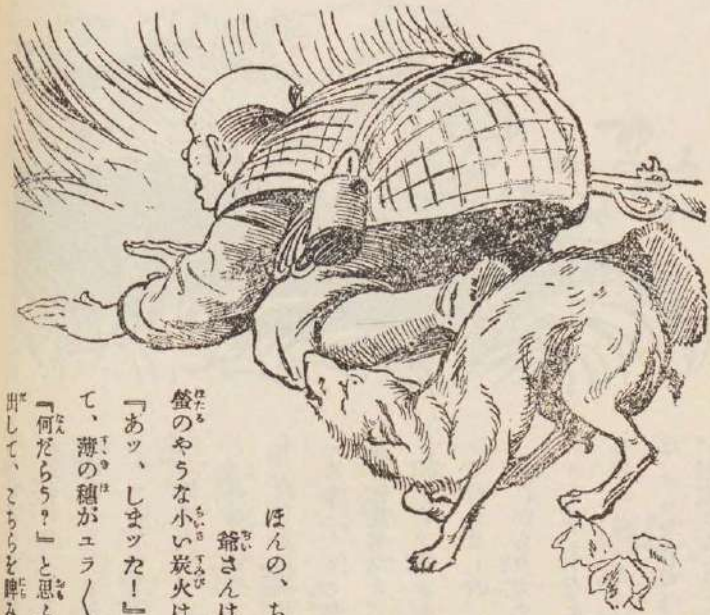
「何だらう？」と近寄つて見ると夫れは大きな猪でありました。クロは左も手柄顔に、其の猪の足をくはへて引張りましたが、山六爺さんは、クロを押除けて、叮嚀に其の猪を調べてみますと、其れは鐵砲で射たれたのでも無く、病氣で死んだのでも無く、たしかに狼に殺されたのだといふ事が知れました。

「クロ！ この猪は狼が獲つたのだよ。若し一口でも、此の猪を食べたら、屹度お前の生命は無いぞ、さ、行かう／＼。」と言つて、爺さんは、無理にクロを引張つて、山の奥の方へ登つて行きました。

夫れから夕方まで、峯から峯へ、谷から谷へ、山六爺さんとクロとは、あちこち駆け廻りましたが、其日に限つて、どうしたものか、兎一疋も山鳥一羽も見付かりませんでした。で、爺さんは、クロを伴つて、もと來た路を家の方へ、急いで歸りましたが、今朝猪の死んでゐた樫の樹の傍まで來ると、急にクロが尻尾を



二七



下げて、耳を立て、ぶる／＼と慄え出ししました。

「クロー！ どうしたんだ？」

山六爺さんは、叱るやうに言つたが、さすが、永い間獵夫をして居た爺さんですから、直ぐ「狼が来たんだ。」といふ事を知りました。爺さんは早速火繩に火を點けようと思つたが、どうしたものか、火を容れてあつた「火ゴロ」(獵夫の持つ火容)の中の炭火が、もう

ほんの、ちよつびりしか残つて居ませんでした。

爺さんは注意して、火繩に火を點けようと思つたが、盤のやうな小さい炭火は、見る見る眞黒くなつて消えて了ひました。

「あッ、しまつた！」と思つた時、右手の草原が、バサ／＼と鳴つて、薄の穂がユラ／＼と搖ぎました。

「何だらう？」と思ふ間も無く、一疋の大きな狼が、ぬツと頭を突出して、こちらを睨みながら、今にも踏みかゝりやうに、身體へを

してゐました。クローは身體を圓く縮めて、タン／＼言ひ仰り、山六爺さんの足の後に隠れました。

「狼さん、狼さん、どうぞ御助け下さいませ。私共は、あなたの獲つた狼を、今朝程一寸見せて戴きましただけです。けれども其肉一切も、毛一本も盗みは致しませんから、どうぞ生命だけは御助け下さいませ。」

山六爺さんは、路の真中へ坐つて、狼を拜むやうに、頭を下げて頼みました。クローも、

「どうぞ、御免下さい。」とでも言ふやうに、小さい聲でタン／＼と鳴らつて居りました。

狼は山六爺さんの言葉が解つたと見え、其まゝ、すラツと頭を引込めて、山の中へ入つてしまつたので、爺さんは、

「やれ／＼嬉しい。」と言ひ乍ら、クローと一緒に、どん／＼と、其所を駆け抜けて、家の方へ走つて行きました。

家では婆アさんが、お夕飯を炊いて、爺さんの歸るのを今か今かと待つてゐました。すると、表の所から、





「あらう、婆アさん。唯今歸つたよ……と言つたのは確かに爺さんの聲だとは思つたが、何だか變に慄え聲でしたから、婆アさんは周章で、外へ飛び出しました。

「お歸りなさい、爺さんですか。まあ、どうした事です、其の顔は、まるで死んだ人のやうに眞青ぢやありませんか。」

婆アさんは屈んだ腰を無理にしながら訊きました。

「助かつたんだよ、助かつたんだよ、なアクロ！ 御互ひに助かつたんだよ。」

婆さんには、爺さんの言ふ言葉の意味がちつとも解らないので、

「助かつたッて？ 何が助かつたのです？」と尋ねました。爺さんも、やつと氣がついて、

「さうく、わけを言はねば、解らない。私とクロとの生命が助かつたんだよ。」

と云いましたが、婆アさんには、マダ夫れだけでは何の事だら、さつぱり判りませんでした。



けれども山が爺さんは、お夕飯を食へながら、詳しく狼の事

を話しましたので、婆アさんも大變喜んで、

「有難い〜、狼様様……」と言つて山の方へ手を合せて拜みました。

「本當にネ、狼様様だ。俺は最う殺されると思つたが……何とかして此の御恩を返さねばならないよ。」

爺さんが斯う云つて考へ込んだ時、丁度家の後で、ぎやッ！と獸の啼く聲がしました。次でウーウ！と唸る聲が聞えて來

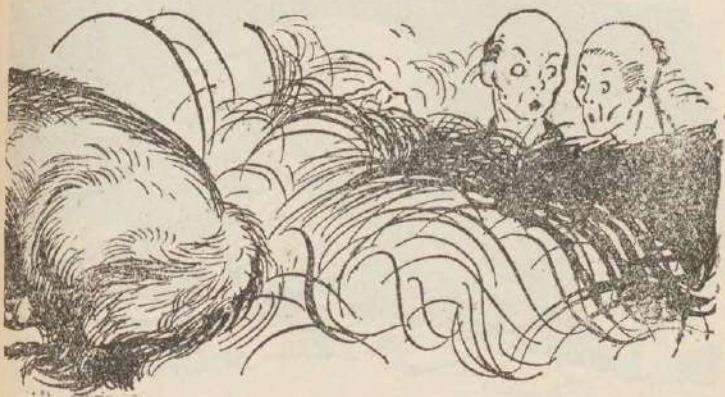
ました。

其聲を聞いた時、爺さんは入口の戸を開けて、クロ、クロ！と呼びましたが、クロは其所らに影も形も見えませんでした。

「しまつた！ クロが狼に殺されたぞ！」

爺さんは涙ぐんで、うろくしてゐましたが、婆アさんは、夫れ程吃驚しないで、

「いゝえ、違ひます。今の啼聲は屹度鹿でした。クロぢやア有りませんよ。」と云つたので、爺さんも、



「さう云へば、さうだ。ではクロは何所へ行ったのか知ら？」  
と云つてゐると、床の下で、クロがクン／＼と鼻を鳴らして、  
「私は恐ろしいから、此所に隠れてゐます。」と云ひたさうにし  
てゐるのでした。

「クロは居た居た、此所に居たよ。」

爺さんは大變喜んで、早速、大きな松明へ火を點けて、山刀  
を腰にさして、

「婆アさん、鹽を出して下ささ、鹽を掌に三杯程出して小さい籠  
に入れて下ささ。」と云ひました。

「鹽を？ 何うするんです、其様な風をして、松明なんか燈し  
て……」

「何でも宜い、早く鹽をお出し、狼様様にお禮をせねばなら  
ない。」

爺さんは籠に鹽を入れて貰つて、松明を燈して裏の山へ行つ  
て見ると、其所には大きな鹿が一疋死んでゐました。云ふまで  
もなく、夫れは狼に殺されたのです。

爺さんは鹿の血を拭いて、鹿の皮をぐる／＼と剥いて、鹿  
の上に鹽を振り蒔いて置きました。

狼は鹽を大變好きなので、翌る朝爺さんと婆アさんが、裏  
の山へ行つてみた時は、もう其の鹿の肉が半分程になつてゐま  
した。

「狼は、うんと腹一杯鹿の肉を食べたらしろ。」と云つて、爺さん  
が、ひよいと頭を上げて、向ふの杉の下を見ますと、其所に  
は大きな二疋の狼が、ぐら／＼と鼻をかいて寝て居ました。

「婆アさん、あれを御覧！」

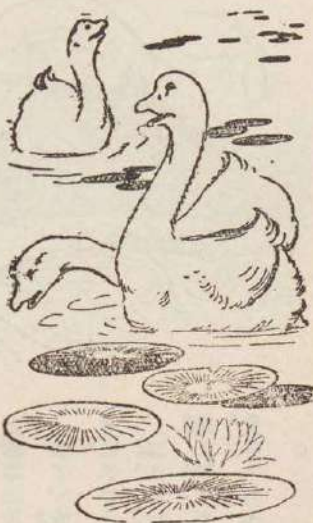
と爺さんは、婆アさんの耳の所で囁きました。

「まア、大きな狼ですネ。」

と婆アさんも小さい聲で言ひました。

二人は足音のしないやうに、そつと家へ逃げ歸つて、クロを  
縄で縛つて、外へ出られないやうにして、其日一日は、爺さん  
自身も外へ出て行かないで、家に引込んでゐました。(つづく)





鷺鳥の王様(つづき)

齋藤 佐次郎

「月山」を出た鷺鳥の群は「蓮華湖」の岸へ着きました。處が、其處は丁度獵人が良をかけて行つた場處でした。鷺鳥の王様は、みんなが無事に湖まで来た事を喜びましたが、なほ心配して

「われ／＼は、幸ひこゝまでは無事に来たが、これからが、用心をしないではいけない。こゝは自分等を顧へよ」と、誰い群は競争中絶で離れてしまふ。もう少しの判棒だ。その内には皆が集つて来るから、私の困つてゐる事が分るに相違ない。」かう思つて、鷺鳥の王様は苦しいのを忍びながら、そのまゝ倒れてゐました。しかし、苦しきは加はるばかりでした。仕舞には流石の王様も堪へ切れなくなつて、思はずと聲、うめき聲をあけました。

鷺鳥たちは、王様の事など少しも考へないで、たゞもうおいしい食物に夢中になつてゐました。

と、不意に、岸の方で苦しそうな、うめき聲がしました。その聲は、たしかに仲間の一人が、良にでも陥ちて苦しんでゐる聲の様でした。鷺鳥たちは、思はず王様の言葉を思出して、驚きました。

「誰か良に陥ちたのだ。このまゝゐると命が無くなる。逃げる、逃げる」と、誰か一人が叫んだので、鷺鳥たちはあはて、入り亂れながら、「月山」の方へ逃げて行きました。

ところが、その中にたつた一羽、残つてゐる者がありました。それは考へ深い鷺鳥のスムハでした。

うと待ち構へてゐる人間の住家なのだ。」と、言ひましたけれども、鷺鳥たちは王様のいふ事など聞かうともしないで待ち切れない様に騒ぎ立てながら湖水の上へ飛び散つてしまひました。

王様は一人岸に残つてゐましたが、心配さうに湖の面を眺めて、

「私は皆が遊び廻つてゐる間、この景色のいゝ岸邊に坐つて、靜かに物を考へよう。こゝに居れば、誰にどんな危険が起つても、直ぐに分るから。」と言ひながら、もし見晴しのいゝ場所へ行かうとして、何氣なく右足を舉げました。ところが、足は何時の間にか良にはまつてゐました。もうどうする事も出来ませんでした。強く引けば引く程良は堅くなるばかりでした。しまひには琥珀の様な足から血がたら／＼と流れました。王様は遂に堪へられなくなつて、ばたき地面へ倒れました。

その時、王様は考へました。

「もし、今自分が大聲を出して騒いだら、皆はさぞ驚いて山へ歸らうとするであらう。しかし、皆は朝から未だに腹にも食べてゐないのだ。これから直ぐに腹を飽らすとす

スムハは、漸水の時に留つてゐる竹を逃げて行く仲間の数を一々数へましたが、一人として残つてはゐませんでした。ところがたゞ一人、王様の姿だけが見えません。

スムハは驚いて、

「良に陥ちたのは王様だ。」と、思はず叫びました。そして、すぐ様湖水の岸へとんで行きました。

湖水の岸では、鷺鳥の王様が血まみれになつて倒れてゐました。スムハは想つた通りなのだ、益々驚きました。

そして、

「王様、私来ましたから御安心下さい。今良から解いて差上げます。」と、いひました。



スムハは力をこめて、王様を良から抜かうとしました。しかし、良は王様の足に食ひ入つてゐて、どうする事も出来ませんでした。王様は遂にあきらめて、

「スムハよ、お前はもう私の事など構つてくれるな。私は到底助からないのだから。……………お前は早く山へ歸つておくれ。……………お前までが私と同じ事になるといけないから。」と、苦しい聲で切々にいひました。しかし、スムハは、

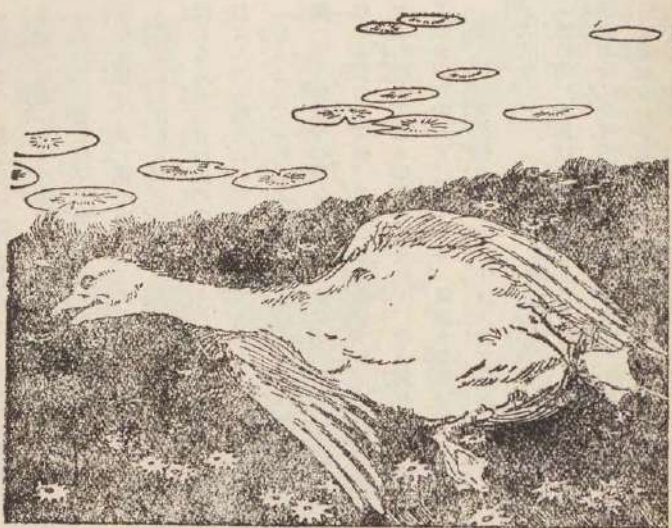
「私は山へ歸りません。私は王様をこのまゝ残して行く事は出来ないのです。命をとられても構ひません、こゝに居ります。どうしても助からないのなら、私は王様と御一緒に死にます。」といつて、王様の傍を離れやうともしませんでした。

### 三

村の人たちをだまそうと思つて、一生懸命面白い話をしてやつてゐた年若い獵人は、その内に話がつきて了ひました。しかし、その時ふと、その日近くの町に祭のある事を思ひ出したので、これはうまいと考へて、その事を話しました。「祭」と聞いたので、村の人たちは夢中

けへ罪を犯しました。

處が、どうしたといふ事です。今度の鷺鳥は、良の



になつて男どもは一人のこらす祭へ行つて了ひました。そこで、若い獵人は「いよく、黄金の鷺鳥は一人占だ。」とほく／＼しながら湖水の岸へ行きました。

獵人は藪の中にかくれて、良の方を見ました。と、目の覚める様な美しい鷺鳥が一羽、死んだけになつて良にかゝつてゐました。獵人はまアよかつたと喜びましたが、たつた一羽なので、ぢきながつかりました。しかし、もう少し待つたら、あんなに澤山ゐる鷺鳥の事だから、五羽や十羽は捕れそうなのだと思つて、ぢつと藪の中にひそんでゐました。

不意に良にはまつてゐた鷺鳥が苦しうに首を擧げて一と聲をいたかと思ふと、何千といふ鷺鳥が一度に飛び立つて「月山」の方へ行つて了ひました。獵人はあきれ、氣を失つた様に見てゐましたが、

「一正だけでも、捕れないより増しだ。」と、つぶやき乍ら藪を出やうとしました。

すると、何處に残つてゐたのか、鷺鳥が一羽、この良へ向つて走つて來ました。

「二羽とれるぞ。」獵人は急に勇氣になつて、また藪か

傍に立つては、泣き／＼良に附ちてゐる友を、捕はうとしてゐるではありませんか。獵人はあきれ眺めてゐましたが、とうとう我慢が出来なくなつて、藪の中から飛び出しました。

「此奴、鳥のくせに何をやるのだ。」

獵人はどなつて、王様を救はうとしてゐるスムハを掴へにかゝりました。しかし、スムハが逃げようとしなないので、獵人はいよくあきれ掴へる積りの手を引きこめました。

獵人はその時、はじめてはつきり黄金の鷺鳥を見ました。遠くで見たのとはまた違つて、そのあまりの美しさに神々しい氣さへして、捕へ様と思ふ心が無くなつて來ました。

「おい、鷺鳥さん、お前はなぜ逃げないのだい。逃げようと思へば、逃げられるのだけ。俺はお前を掴へやうと思つたが、あんまり綺麗だから止めるよ。さア逃げて行きな」

と、獵人がいひました。

すると、スムハは悲しうに獵人を見て、



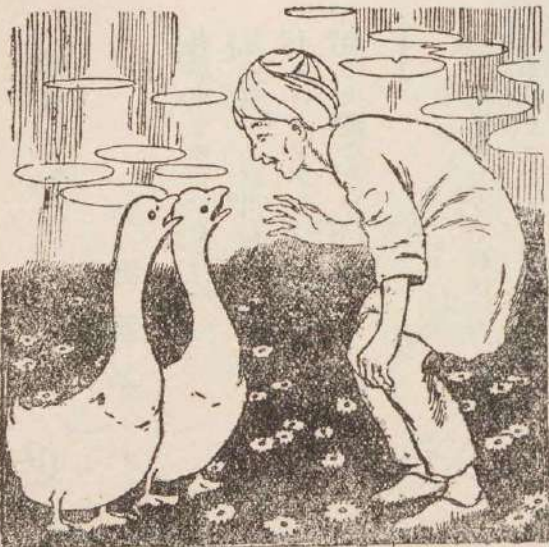
「獵人さん、あなたが、良で擲へたのは私達の王様です。私達には命よりも大事な方なのです。」と、いひました。

しかし、獵人は不思議に思ひました。精巧で力の強い善の王様が、良に陥ちるなんて馬鹿なことがあるものかと思ひましたから、「お前は妙な事をいふね。鳥だつて王様になる程の者は精巧な筈だ。それなのに、何んだつて良なんぞへ陥ちたのだ。」と、ききました。

「獵人さん、それはあなたが間違つてゐます。人間は何處へでも構はずに良をかけて行きます。處が、王様といはれる程のものは、自分の事は構はずに、外の者の事はばかり心配してゐるのです。それで、つい良なんぞへ陥ちてしまつたのです。」と、スムハは泣き乍らいひました。

獵人は職業に似合す、心の中は大層すなほで、親切な男でした。

「兎に角、お前は仲々精巧な鳥だ。私はお前を逃がすと、大儲けをしそくなるのだから仕方がない。お前だけは捕らうと思はないから、早く山へ歸つて仕合せに暮すがいい。今度はお前が、代つて善の王様になるさ。」と獵人が、やさしく言ひました。



しかし、賢明の王様は犬世帯をしてゐるので、ベタリ地面に倒れたまゝ動くことも出来ませんでした。それを見た獵人は、鷺鳥を抱いて湖の縁へ行きました。そして、大きな一枚の木の葉を拾つて湖水の水を掬つては、幾度も幾度も傷ついた足を洗ひました。黄金色の羽毛につい

「しかし、私は王様が死ぬ位なら、生きてゐたくはありません。王様をこんな處へお連れしたのは私達の罪なのです。私も王様と一緒に死にませう。」かういつて、スムハは泣きつよけてゐましたが、ふと考へついた事があつたと見えて「獵人さん、あなたは今、私をゆるしてくれるといひましたね。それなら王様の代りに私を擲へてくれませんか。私と王様とは歳も同じです。身體の大きさも同じです。羽毛だつて、肉だつて殆んど變りはありません。王様の代りに私になつても、あなたには大した損でもありません。ですから、どうぞ王様をゆるしてあげて下さい。」と、また泣き／＼いひました。

獵人は思はず涙を流しました。今迄の懐かしい考へはすつかり消えて、實に可哀そうな事をしたと思ふ後悔の心で一ぱいになつてしまひました。

「あゝ、實にお前は感心な鳥だ。それ程お前が頼むなら、いゝとも、お前の王様を許してあげよう。またお前も許してあげよう。今良からとつてやるから、早く山へお歸り。ぐず／＼してゐて、私の心が變るといけないからね。」かういつて、獵人は良をのりました。

た血まで、すつかり掬ひました。

獵人はながい間さうしてゐましたが、「蓮華湖」の水には、靈藥が含まれてゐるので、王様の傷は程なく治りました。そして、もう幾ぶには産支へない迄になりました。その時、湖水に映つてゐた山や木立ちの影が次第に長くなつて來ました。靜かな夜が近づいて來たのです。スムハは夕暮れになつた事に氣づいて、立上りながら、「獵人さん、夜になると山へ歸れなくなります。王様も飛べる様になりましたから、私達はこれからすぐと山へ歸ります。大層御世話になつて有難う御座いました。あなたは、どうぞ、この先き仕合せに暮して下さい。」といひました。

「有難う、鷺鳥さん。お前のお蔭で、私はよい心の人になれた。もう獵師はお止めだ。私も是からこの村を去つて、都へ行くよ。そして、よい職業を見つけよう。」かういつて、獵人も立上りました。

間もなく王様とスムハは翼を揃へて、靜かに「月山」の方へ飛んで行きました。そして、獵人は仕合せさうな顔をして、そのまゝ都の方へ立去りました。(をばり)



春風のうた

茅野雅子

春が来そめた夕ぐれに、  
私は森をとび出して、  
小さいランプを持ちながら、  
星の火蓋に火を點す。  
そよ。

春が来そめた夕ぐれに、  
私が森をうごかせば、  
まるいまある月が出る。

月は私のお友達  
そよ。そよ。

春が来そめた夕ぐれに、  
私が森で笛ふけば、  
甘く、かすかに、やはらかに、  
子供は床に寝にはいる。  
そよ。そよ。

そこで私は昨夜ちう、  
月と二人で考へた、  
お伽話に似た夢を、  
子供の上へまきちらす。  
そよ。そよ。そよ。



烽火



横山壽篤

ひかし、ひかし、支那に周と云ふ國がありました。その國の後は、褒姒といふ方で、それはそれは美しい人でした。ちやうど龍宮の乙姫さんのやうに、綺麗な方でした。

處が、褒姒は一度も笑つたことがありません、只お人形のやうに、美しいばかりで、微笑をしたのさへ見た人がないのです。こんな綺麗なお后が、もし笑はれたら、どんなに美しいだらうと、王様も、褒姒は「いと」と町の町で云つたばかりです。王様は尙重ねて

も、おそばの人達も、家来も、みんな、さう思ひました。まるで雲に蔽はれたお月さまが、雲から出て来るのを待つやうに、褒姒の笑ふのを、國中の人が待ちのぞんでゐました。けれども、いつまで経つても褒姒は笑ひませんでした。

王様はもうたまり兼ねて  
「そなたはなぜ笑はぬのぢや、どこか身體の具合ひでも悪いのか、醫者に見せようか、薬を飲んではどうぢや」とと機嫌をとるやうにいひました。おと云ひますと「ほんとうに計策の通りでございます、無事泰平でございますから、妾には可笑し

「私も、もう安心ぢや隣國は悉く私の威光に恐れてゐる、驚の前の小雀のやうに、怖ぢおびえてゐるのぢや。そして又、國中の人民は皆善良ぢや、私とそなたを、日と月のやうに人民は敬うてゐる、もう何も心配することはない。」



那は、無事泰平ではなかつたのです。國と國とが絶えず睨み合つてゐて、少しでも隙があれば、町

事もございませぬ、可笑しいことがないから、心から笑ふやうなこともございませぬ。」と褒姒は申しました。その實、その頃の支

ち亡ぼさうとして、互に油斷をつけ狙うてゐたのであります。周の國のぐるりは、皆敵國でした。王様は其を忘れて、たゞ此上の望みは、お后を笑はせさへすればよいと、斯う思つてゐたのであります。

王様は國中にふれを出しました。それは「お后を笑はせる事の出來た者には、



何でも望み次第の物を與へて高い位に上せてやる」といふ事でした。そこでそのふれを聞きつたへて、大勢の人民が、お城に押しよせてきました。

滑稽な男もございしました。

「私は此様に、何時でも、ニコニコしてをります、私がお目通りをすれば、必ずお后さまは笑ひになります、どうぞ私を王様に取次ぎ下さいませ。」といつてニコニコしてゐる蛭子様のやうな男もありました。

その他、おどけの上手なもの、歌のうまいもの、踊自慢のものもありましたが、中には逆立を御覽に入りたいと云ふ突飛なものもございました。

王様はお后を笑はせたいばかりに、申込んで來るものはみんな採用して、お后に逢はせました。併し褒姒は、百面相を見ても、歌を聞いても踊を見ても、ちつとも笑ひませんでした。そこへ、あはだしく一人の家來が飛び込んでまゐりました。そしてせきこんで申しました。

「王様……王様……」

「私はきつと、お后さまをお笑はせ申して見ます、どうぞ私を王様に取次ぎ下さいませ。」といつて申込むものがあるかと思ふと、

「私はお后さまがお笑ひにならぬ原因を知つてをります、どうぞ私を王様にお取次ぎ下さいませ。」と頼むものもありました。

「私は誰にも出來ぬ百面相をお目にかけます、私の百面相を見て笑はぬものはございませぬ、どうぞ私と王様に取次ぎ下さいませ。」と云ふ

「なんぢや、よいお前へてあると申すのか、早う笑はして見よ」といひました。

「それ處では御座いませぬ、大變でございませぬ、大變でございませぬ、隣國から攻めて來ると云ふ知らせがございました。」と家來はやつとのことて申しました。王様の顔は忽ち蒼白になりました。

## 二

大事の起つた時に、軍勢をお城に呼びよせるには、烽火をたいて相圖をしました。ちやんと平常から手筈が定つてゐまして遠くからでも見える高い山の頂で、松明を燃します。それを見て次ぎの山の頂でも同じやうに烽火を上げます。斯うして次々に、烽火の相圖をして、大事の起つた事を、一時に國中へ知らせる仕掛けになつてゐました。隣國から攻めて來たと云ふ知らせに、先づ第一にお城の近くの峯で、烽火があげられました。明

明と燃え上る火は、王様の蒼白な顔を照しました。火は次ぎから次ぎへ、峯から峯へと、飛火のやうに移りました。それを見てゐた褒姒は、突然「ホホ……」と笑ひました。その笑顔は、ほんとうに神々しく美しかったのです。

王様はもう敵が攻めよせて来るといふことを、半ば忘れて了ひました。褒姒が笑つた、后が笑つたと、赤坊が初めて立つたのを見た親のやうに、無暗に喜びました。そして、もつと笑はせようと思ひましたけれども、もう褒姒は笑ひませんでした。軍勢は續々上つて来ました。隣國からどんなに澤山の人數が、攻めて来ようと、それを打ち破るに十分の準備が出来ました。其準備に恐れのか、或はほんの噂だつたのか、其時は何事もなくすんだので、軍勢はそれ／＼歸つて行きました。褒姒を笑はせることに苦心してゐた王様は、

は呆れて行ひました。城中の兵隊が一度も城に上れば、大層な入費が掛りました。烽火は國を護る爲の大切な機關でした。兵隊は國の爲には貴重な寶でした。それに后を笑はせるといふ、唯それ丈の事で、幾度も烽火を上げ、幾度も軍勢を駆上らせて、王様自身は平氣でゐたのでした。國中の人が呆れたのも無理はありません。そこへつけこんで、今度はほんたうに、隣國から攻てきました。烽火は峯から峯に飛びました。けれども國中の兵隊は烽火になれてゐました、烽火に驚かなくなつてゐました。是迄何度も駆付けをが、これが皆な

褒姒の笑つたのを見ました。王様はどうたら、褒姒を笑はせることを覺えました。それは烽火をあげることでした。そこで王様は、何事も無いのに家來にいひつけて、烽火をあげさせました。褒姒は再び笑顔を見せました。すは大事だと、軍勢はお城へ集つて来ました。處が何事も無いので、おや／＼といつて、皆引きあげました。暫く経つてから、王様は又烽火を上げました、褒姒は前と同じやうに笑ひました。こんどこそはと云ふので、軍勢は續々と上つてきました。けれども別に變つたことがないので、おや／＼といつて歸つて行きました。

王様は斯うして、何度も／＼烽火をあげて褒姒を笑はせました。その度毎に軍勢は駆けつて来ました。結局軍勢は氣抜きの體で引あげるのでした。褒姒王様に忠告してあつた家來も、王様の行ひに無意味だったので、今度もまたかと思ひました。そこで駆せつける兵隊は一人もありませんでした。やがて多くの敵は、備へのない城に攻め寄せてお城に火をつけました。するとお城の中から、尻尾の三つある狐が飛出して「コン……コン……コン……」



となきながら、山の中に逃げて行きました。此狐は後の褒姒でした。周の國を亡ぼさうとしてゐる隣國の王さまが、魔法を使つて、狐を周の國のお后にしてゐたのでした。

お城の中の王様はどうなつたでせう？  
周の國はどうなつたでせう？



蟹満寺の出来た譯

長田 秀雄

むかし山城國、久世郡と云ふところに蟹満寺と云ふ古い古いお寺がありました。その御寺の出来た譯を皆さんにお話しませうと、あるとき、年を取つた坊さんが、私たちに言ひました。坊さんは「恐い面白いお話ですよ。」と云つて、ニコニコしてゐました。

むかしむかし、山城國の久世郡の百姓で、家中のものが、皆佛さまを信心してゐる家がありました。その家の娘が、わづかに七つになつたばかりで、「昔聞かぬ」といふ有難いお話を、毎朝毎朝お経を

よむと云ひました。性來情深い娘は、その蟹が可愛さうで耐らなくなつてきました。そこで

「小父さん。そんなにびんびんしてゐる者を煮て殺すのは可愛さう

だわ。私に頂戴。」と云ひました。村

の人は頭をよつて「いや、折角だが

こんなお甘い物を只やるのはいや

だ。」と答へました娘はどうかしてそ

の蟹を救けてやりたいと思ひました。「おちやね、小父さん。私の家へ他處から買つたお

甘いお魚の干物が澤山ありますから、その蟹と



の方へ向つて讀んでゐました。

貧乏な百姓の事ですから、お父さんやお母さんは、一日野良へ出て働いてゐます。娘は仕方がな

いので、一人で小川の傍や、花のさいた野原で遊んでゐました。

すると、或日、村の人が大きな蟹を持つて娘の遊んでゐる野原を通りました。娘はそれをみると

「小父さん、大きな蟹ね。その蟹をどうするの。」と訊きました。村の人は「家へ持って歸つて、煮て喰べるのさ。お甘い

りかへて頂戴。皆上げますから。」と、また云ひました。村の人は誰々承知しました。

そこで娘は村の人をつれて自分の家へ行つて、一抱へほどの干物とその蟹を取換へてもらひまし

た。娘はすぐその蟹を小川の内へ逃してやりました。

蟹は喜んでよくよく水泡を立てながら、底の方へ沈んでしまひました。

夕方になると、お父さんやお母さん

が野良から歸つてきました。娘は早速けふのお話を

お父さんにしやうとしました。何うしたのか、お父さんは、夕御飯のお膳に向つても元氣が

四九

ありません。あんまり呆やり考込んでゐるので、娘は心配してお父さんに聴きました。するとお父さんは

「娘や、けふは私は悪い事をしてしまつた。どうか勘忍しておくれ。」と云つて涙ぐんでしまひました。

「悪い事つて何です。」

「實はね、今日

いつものほり

畑をたがやしてゐると、一疋の蛇が蛙を半分呑みかけてゐるのさ。あんまり可愛さうだつたから、おい蛇さん。そんな無慈悲な事をするんぢやないぢやしてちやりつて云ふと、蛇は毒々しい眼で、

「お父さん、蛇ともなく、現ともなく、並派な佛さまが現はれて、

「娘、決して心配するんぢやない。大丈夫、私がお前を守つてやるから。もし蛇が今夜にもやつて来たたら、三日経つてから来てくれと云つておやり。そして三日の間に、お前の入れるだけの大きなの丈夫な箱をこしらへて、その内へ入つて、そのお經を一生懸命に讀んでおゐて。さうすると、きつと救かるから。」とかうおつしやいました。

果して夜中過ぎると、表をたたく音がしました。お父さんが出てみると、立派な装をした若い綺麗な人が立つてゐました。そして、

「お約束に従つて来ました。」と云ひました。

「ちや三日経つてから来て下さい。いろいろ仕度もありますから。」とお父さんはふるへながら返事をしました。若い男は黙つて歸つて了りました。

何かくれたら放してやらうと、かう云ふんだよ。そこで私はつひ、ちや、お前を娘の婿にするからと云つてしまつたのさ。すると、きつとだねと蛇は念を押して、蛙を放してしまつたんだ。あとで、

あゝ、つまらない事を云つてしまつたと思つたが、もう追付かない。」とかうお父さんは云ひました。



さんにするのはどうしても嫌でした。困つた事になつたと思つて、心配しましたが、何うも仕方がありません。そこで一心不乱に佛さまにお祈りをしました。そこで、「普門品」といふ御經を讀んで

三日目の夜、娘は箱の内へ一心不乱にお經を讀んでゐますと、何とも知れず恐ろしい音がして

「畜生、よくも俺を欺したな。」と云ふ聲がきこえました。

お父さんとお母さんは庭の真中の箱の内に隠れてゐる娘の事が氣にかゝつて耐りませんが、恐いので、戸をしつかり閉め切つて、お念佛をとこなへながら小さくなつて居ました。すると、何だか尻尾のやうな物で、箱の戸をたたく物凄いな音がひつきりなしに聞えます。その内、その音がやんだかと思ふと、何者か、苦しがつて泣きさけぶ聲や、うなる聲がつゞけさまに聞えてきました。そして恐ろしい夜が明けました。

やうやく泣きさけぶ聲が、聞きなくなりましたから、恐る恐る、お父さんが戸を叩いてみますと、その有様と云つたらありません。庭中一パイ

大きなや、小さな蟹の足が、幾千となく散ばつてゐます。内には鉄のついたものもあります。そして、小さな蟹が幾つとなく死んでゐました。

娘はどうしたらうと思つて、箱の方を見ますとその箱にしっかりと巻付いて大きな蛇が傷だらけになつて死んでゐました。箱の内からは「普門品」を讀む娘の聲が細々と聞こえてきました。お父さんとお母さんはやつと安心して、箱の内から娘を出しました。娘は無事でした。そして、云ひますには、一度真夜中と思ふ頃、蛇が箱の周圍を巻付けて、強くしめるので、もう箱が破れるかと思つて生きた心地もなく夢中になつてお經を讀んでゐますと、また夢ともなく、現ともなく、佛さまが現はれて、

「決して心配するんぢやない。お前が産間救けてやのた蟹が大蛇の卵をつれてきて、思返しに蛇を

殺してしまふから、安心してゐて。」と、あつしやいました。

すると、案の定しばらくして、蛇は苦しみ出しました。そして夜明け頃には、苦しみ死に死んでしまつたのです。

親たちはこの話をきくと、大徳佛さまの御恩に感じました。そして娘のために死んでくれた蟹を、氣の毒だと思ひました。

そこで、庭中の蟹の足やら殻やらをひろひ集めて、死んだ蟹と一緒にして、深い穴を掘つて、厚く葬りました。蛇も一緒に葬つてやりました。

人間も恥入るやうな立派な蟹の行ひのために何かしてやりたいと、かう娘もお父さんもお母さんも考へました。

丁度、その頃、その村へやつて来た名高い坊主があつて、その話をきいて、

「それはお寺を建て、永久に供養をしてやるのが一番だ」と教へてくれました。が、貧乏な百姓には、そんなお金はありません。

ところが、それからその家は、段々幸福が続いて、五六年たつたかた、ないうちに、近邊で一番のお金持になりました。

そこで、その坊さんに頼んで、立派なお寺を建て、貰ひました。

そして、蟹満寺と云ふ名をつけた。その百姓の家はそれから長い間榮えましたとさ。

年を取つた坊さんは、かう云ふ話をしてくれました。皆は、おとなしくお手を膝の上に乗ねてきいてゐました。(おはり)





# 一生不平を云った豚の話

青木茂



ノアお爺さん  
と、おばあさん、  
それから息子の  
夫婦と、其の子  
供達は、近頃一  
生懸命に町から  
遠くない山の中

ノアお爺さん、  
人達は皆、  
「又あの謙馬鹿のノア達が變な物を作り始めた。  
あんな山の中で、しきりに大きな箱を作つて居る  
が、何を入れる氣なんだらう。第一あの箱が出来  
上つても持つて歸る事が出来ないではないか、や  
れやれ、馬鹿な人達だ。」  
とお互に嘲笑つて話して居りました。

に入つて。しきりに大きな箱を作り始めました。  
何んでもその大きさの素敵な事と申しましたら、  
其頃の事をよく書いてある歴史によると、長さ二  
百キュビト、高さ五十キュビト、高さ三十キュビト  
程もあつたと申します。今のもの尺に直したら必  
つと大きな帆まい船ぐらひはあつたでせう。町の

ところが、この箱大工の方では何んだか知りませ  
んが、一生懸命であります。朝から晩迄、油汗を  
流して働いて居りました。どうして町の人達の様  
に一分間でも餘計に懶て居て、少しでも多く旨い  
おつゆを吸ふ事などは考へて居ませんでした。  
この人達の仲間が一番早くお手傳に來たのは一

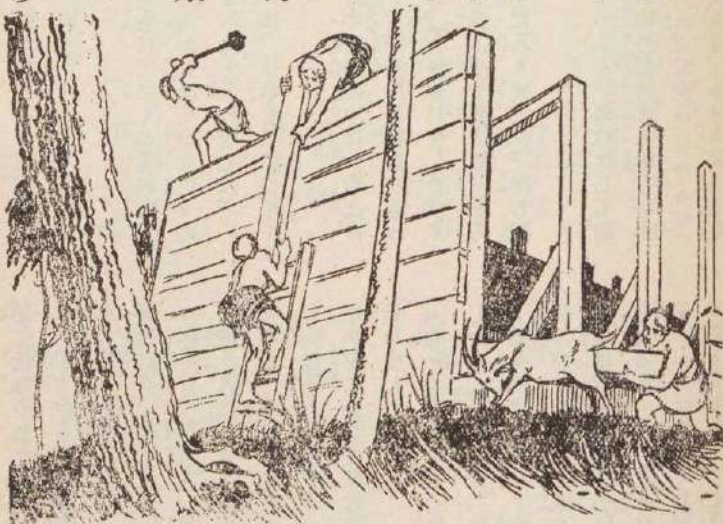
番の牛であります。牛は自  
分の強い力を何なりともお  
使ひ下さい、とノアにお願  
ひ申しました。ノアは喜ん  
で、

「あ、牛さん、君は材木を  
運ぶ役をして下さい。何し  
る材木は重くつて困つて居  
たのですから。」

次に、どうか私もそのお  
手傳を致し度う御座います  
と申して參りましたのは羊  
であります。

「そう、君は、その固い角  
と、強い額で箱を張る時、  
まがつた木をしつかり抑へ  
て下さい。」

こういう工合に七種類の



動物の夫婦が一番づ、皆自  
分達の方から進んで、この  
仕事の方に働きました。鳥  
や蟲迄が一生懸命になつて  
精一つばりの手助を致しま  
した。

さてこの箱が出来上り、  
鳥どもが集めて來た松の脂  
ですつかりすき間を目塗し  
て、これで大仕事もやつと  
終つた、と喜び合つて居た  
時、この仕事場の脇に來て  
いつても何の仕事もしない  
で、ごろごろ邪魔をして居  
た豚の夫婦は、口を尖らせて  
「何て馬鹿な奴だらう。  
一體何にもならないこんな  
物が出来たつて喜ぶには當

らないではないか、ほんとにつまらない奴等だ。」  
とちつとも仕事をしなくせに、人一倍不平を云  
つて居りました。

ノアはそれから七日間の内に、多くの食料や、  
又色々な必用道具。又小鳥達が集めて来た色々な  
草の種などを箱の中に、きちんと入れました。

二月の十六日の晩、ノアは、仕事を手傳つてく  
れた獣達に、

「さあ、皆さん、私達はこの方船の中に入らな  
ければなりません。もうおき、神様は約束なされ  
た通りになさるでせうから。」と申されました。す  
ると獣達は、皆ノア老人の云ふ事を聞いて、ぞろ  
ぞろこの山の上の方船の中に入りました。併し豚  
だけは、

「何が神様のお約束だつて、ふん。馬鹿にして居  
るな。けれども俺だけが箱の外に居ても淋しいか  
ら皆といつしよに箱の中に入つてやれ。おやあや、  
いやに息苦しい、けちな箱だな。おまけに入口迄

が出来ましたでせうか。いや、皆さんは熱湯  
を浴せた様に死に絶えたと申します。

水は百五十日間も、地面すつかりはびこつて居  
りました。高い山の頂上に生て居る大木迄、すつ  
かり洪水の底に沈んで居りました。その間、ノア  
老人達は、多くの生き物といつしよに方船の中



明日水が引くか  
あさつて山が現  
れるかと楽しみに  
して居りました  
獣達も、皆、  
ノア老人の方船  
に乗つて命を拾つた事を喜んで、おとなしくして  
居りましたが、豚だけは、

「毎日々々いやに雨ばかり降つて居る。氣も心も  
くさくさしちまふぢやないか。それに第一ノア老  
人は呑ん糞でろくな食物を食はせない。とてもこ  
れではやりきれない。」とぶらぶら毎日不足を申し

閉て仕舞つたな。」とぶつぶつ申して居りました。

夜明方から、大雨大風になつて参りました。町  
の人達は一生懸命に、雨戸を外されない様に、家  
が倒れない様にと大騒ぎを始めました。此時、

「洪水だ、洪水だ、屋根に昇れ。」と云ふ聲が町の  
一番外れにあつた家から響きました。人々は驚き  
怖れて、皆屋根に昇りました。

雨は段々と強くなつて参ります。其の内に少し  
低い處にあつた家などは、人間をのせたまゝ流れ  
始めました。

「助けてくれ——、助けてくれ——。」と云つて居ま  
したが、流れた家は、ひつくり返つて了りました。

益々水は多くなり雨は強くなりして、どの家も  
皆浮び、ひつくり返つて、其内に強い泳の出来る  
人達は、他人の板子になぞすがつて流れて居るの  
を見ると、それを奪ひ合つたりして、どうかして  
助からうし致しましたが、雨は四十日四十夜も降  
つたと申します。どうして町の人は生て居る事

て居ります。

十月の始めに山々の嶺が少し現れました。ノア  
老人は鴉を放して見ました。鴉はまだ方船の外に  
止つて寝る處も無いので歸つて参りました。それ  
から又四十日目に鳩を放して見ましたが、まだま  
だ地面まで水が引いて居ないと見えて、すぐ歸つ  
て来ました。此度七日目に、又鳩を放して見まし  
たら嬉しい事に、口に橄欖の新芽をくはへて参り  
ました。

「もうすぐ俺達は地面の上へ降りられるのだ、こ  
んな有難い事はない、みんな、よく神様にお禮申  
さなければいけない。」と獣どもは喜んで申しまし  
たが、例の豚だけは、

「神様にお禮だつてお目出度いにも程がある。俺  
達は神様の爲にこんなに苦しんだのだ。毎日々々  
お太陽の光も見ないで退屈して居たのに、此上神  
様にお禮を申せばいい面の皮だ。」と一人で腹を立  
て、居りました。



出して、

「さあ獸よ、鳥よ蟲よ、お前達はどこにでも行つて一生をお暮しなさい。私達は皆お前達の幸福を祈つて上ましやう」と申されました。

獸も鳥も、蟲も皆大喜びで、長い日數を送つたこの方船と

それから七日目に鳩の夫婦を放して見ました。鳩は自分の住む土地を見つけたと見えて、歸つて参りませんでした。

翌年の二月の二十七日にすっかり地面の水が涸いて、これならどんなに弱い小鳥や蟲でも安心して土に住む事が出来る様になりました。ノア老人は志を聞いて、此の新しい地面に皆を

りか爺さん、俺を船に乗けたのも何かの運命と思つて當分俺を養つてくれないか。まだ方船の中にだつて俺の食物ぐらゐはあるだらう。」と蟲のいゝ事を申しました。人のいゝノア老人は、

「あゝいゝとも、俺等にしてもお前達夫婦を養つて行く事ぐらゐは出来るだらう。地面が肥えて、食物に不足の無くなる迄俺の處にゐるが、いゝ」と快く許してくれました。外の獸は、一生懸命に働いて食べて居るのに、豚は毎日寝ころんで人間に食べさせて貰ふ事になつたのであります。

ずるい豚は、ノア老人達が一生懸命に作つた大根や菜葉の畑を、遠慮なく人が見て居ないと荒し始めました。それも、かたはかしら少しずし、食べ

て行くなら我慢も出来ませんが、一口食つては「これもまずい、これも餘り旨く無い。こいつはなほいけない」と皆を囁ります。で息子達は、「あんな豚は大きな畑を作つて入れないといけません。」と云つて柵を作つて入れて仕舞ひました。

色々お世話になつた、ノア老人に別れを惜んで、おのゝ別々な方面に、自分が生て行く食物を見つけに立ち去りました。ところが、動く事が、大嫌で、理窟ぼくつて不平家の豚だけは、ノア老人に口を尖らせて申しました。

「爺さん、俺はいやだよ。今俺が一生懸命になつて食物を獲し廻りたつて中々大骨の話を。それよ」又人間が爺として俺をこんな處へ遣つたな。それにこの食物はなんだ。たつた麥だけじゃないか少しはキャベツを食はせてくれてもいいものに、ぶらぶら。」と、豚は腹を立て、居ります。

その内にノア老人も病氣で死に、その子、その孫と云ふ工合に段々と代が變るにしたがつて、豚を大切にしなくなりました。豚は、何を食べさせても不平を云つて居りますし、不潔で汚いものですから、皆んなが嫌つて居ります。

「今度豚小屋をもつと屋敷から遠へ作らう。あんなに汚くつて、臭くつて、不平ばかり云つて、やかましいから。それから何を食はせてもぶつぶつ云ふから、思ひ切つてまずい、物を食はせてやれ。」と云ふ事になりました。

それから豚どもは遠い、そして、日の當らない、どぶの脇に、少な箱の中に入れてられて、腐つた糠味噌や、大根の尻ばばかり食べさせられる事になりました。(をほり)



### 瑞巖寺の和尚

三島 章道

六〇

昔、仙臺の殿様は、攝津といふ國の松尾寺に居る雲居和尚といふ坊さんが、清らかな氣高い坊さんである事を知られて、わざ／＼いい御臣をお遣しになりました。そして、仙臺の松島にある瑞巖寺に来て下さいと、御頼みになりました。

雲居和尚は喜んですぐ行かうと思ひましたが、丁度その時貧乏をして、村の人から釜を借りて居た事と思ひ出しました。それが氣になりましたの

でも味噌味噌としか見えない坊主が、一人てノコノコやつて来ました。仙臺の殿様の御臣は、この坊主に聞いたら様子が知れやうと思つて、

『途中でもしや、雲居和尚と云ふえらい坊さんには選はなかつたか？』

ときいてみますと、その穢い坊主は

『私が雲居です。』と云ひました。臣はすつかり恐縮つて、急に頭をベコ／＼下げてお辭儀をしました。そして、今迄の失禮をわび、それから澤山の下役の騎兵や歩兵に護衛れて、堂々と松島につきました。

それから、雲居和尚のきれいな心持や、尊いお説教をしたつて、あつちからも、こつちからも、人々が瑞巖寺にやつて来ました。又仙臺侯も、親しく和尚に會つてごらんになつて、話をあき／＼になり、ますます和尚が立派な人であることを告知

で、そのお使ひの臣にその事を話し、二三日待つて戴きました。それからお寺のお務をして、お金を貰ひ、それで釜の代金を支拂つて、それからゆる／＼と仙臺にやつて行きました。

仙臺の殿様は大變お喜びなまつて、お國境まで又御臣を澤山迎ひにお出しなさいましたが、一向その人らしい坊さんは来ません。するとそのうちに、穢い御代金を被り、どうみ

りになつて、感心なさいました。そして、と／＼話をきいて教へをお受けになりました。

所が仙臺侯の劍道の御指南役に、松林扁也齋と云ふ武士がありました。この人は大變劍術の名人で、誰一人この人になふ者がありません。それでますますお天狗になつて、大えばりをして居ました。

此武士は、近頃雲居和尚とか云ふ坊主が他國からやつて来て、大層此國の人々から尊敬れ、又殿様までも感心していらつしやると云ふ事を聞いて一寸不平に思ひました。なぜかと云ふと、扁也齋は、世の中に男子と生れて来たからには、一番偉い事は戦争に勝つことで、その戦争に一番大切な劍道は、男子のする事で一番偉い事だと、堅く思ひ込んで居たからです。所が坊主が、小さな庵室の中で坐禪をくんで考込んでみたり、人々に生さ

六一

物を殺すななどとお説教をしたり、お念佛をした  
りして、汗も出ないやうな、らくな事ばかりして  
居るのに、人からそんなに尊ばれる理由が解りま  
せん。殿様も、あんな坊主の話を聞く暇が  
なさるのなら、その御暇にそれだけ餘計に、  
劍道をお勵みになればいゝのと思つて居ました。  
所が扁也齋は友達から、  
「禪道も劍道も筋道はあなじだ。」  
と云ふ話を聞きました。

禪道とは坊さんなどが、坐禪をしたりして、業  
をする事です。それで扁也齋はます／＼解らなく  
なりました。若しかすると、あの坊主が、そんな  
でたらめを云ひふらして居るのかもしれない。よ  
しそれなら一つ己があ坊主の膽玉を抜いてやら  
う。そして試してやらう。どんな方法がいゝかし  
らん……と考へて居ました。

面白くつて、をかしくつて堪らなくなりました。  
或夜の事でした。その夜は、空には月も星もあ  
りませんでした。世界はまつ暗のくら闇で、まる  
で墨の中に漬つたやうでした。

扁也齋は今夜こそと思ひ定めて、そのまつ暗な  
世界の中を、尻つばしよりをして、小さな提燈の  
火をたよりに並木道を、サ  
ツサと走つて雄島の方へ出  
かけました。夜がふけたと  
見えぬ、もう

人通り  
はあり  
ません  
鼻をつ  
まゝれても  
わからぬやうな暗さです



すると其頃雲居和尚は、毎夜寺の中の人が寢静  
つた頃をはかつて、雄島にある小さな庵室に、坐  
禪をくみに行くと云ふことをききました。

雄島と云ふのは松島の一つで、岸ごく近くに  
あつて、岸からは圓木橋がかゝつて居ますので、  
舟にのらずとも行ける島です。島には形のいゝ老  
松が茂つて、ゴツゴツとした岩の下の方には、白  
い波がざあ／＼と音を立てゝゐます。大變景  
色のいゝ島で、和尚の庵室はそのみどりのふかい  
松の森の中に、チヨコンとあるのです。

扁也齋はそれをきくと、こいつはいゝことがあ  
るわい、よし來た。そこへ坊主の先生が出かけて  
行くところを、一つおどかしてやれ、こいつは面  
白いなと思つて、一人でくす／＼笑ひました。坊  
主め、どんなにびつくり仰天するかしらん。扁也  
齋は坊主をおどかしに行くと云ふ事が、なんだか

が、幽かな提燈の火をたよりに行く手を見ると、  
右にも左にも、年老ひた、大きな松の木が、うね  
／＼と生えて居ます。其太い幹のあたりを提燈を  
懸してみると、まつ黒い大蛇でものたくつて居る  
やうに見えます。どうもあんまり氣味がよくあり  
ません。

しかし、扁也齋は劍術の名人ですから、どんな  
こわいものが出て、こはくないと思ひつゝ、自分  
て心を無理におちつけるやうにして、どれかいゝ  
松の木はないかしら、もう雄島にも近いから、こ  
の邊がいゝだらうと見て廻りました。

すると、一つたいそう枝の下の方まで垂れさが  
つた松が、みつきりましたから、扁也齋はその木  
の幹へしがみついて、お猿のやうに、する／＼と  
攀ぢのぼりました。そして、その垂下つた枝の方  
へわたつて來て、丁度往來の上あたりの所へまた

がり、ふつと提燈の火を消しました。

世界は又まつ暗になりました。ザア／＼と云ふ浪の音や、遠くの方に犬の遠吠の聲も聞こえます。冷つこい風がサツとふいて来て、松の枝が、ザワ

六四  
總て、ボク／＼と木履の音が、次第に近づいて来ました。坊主が来たなど、扁也齋は身がまへをし震した。そして、丁度その枝の下に和尚が来たとき、扁也齋は無言で和尚の水瓜のやうなくりく



ザワとゆれます。すると冷たいものが扁也齋の襟首の中に入りました。それは松の枝からたれた夜露でした。

り頭を、にちやりと両手で、力一ぱい握りました。キヤツと云ふだらうと思つた和尚は、うんともすんとも云はず平氣で、頭を震らされたまゝのまじ

つて居ます。これには扁也齋も、少しかたがはづれされたが、名をなめるのも残念ですから、こつちもだまつてそのまゝ、ます／＼堅く和尚の頭を握みしめました。けれども、そのうちに扁也齋は手がくたびれてしまひました。それで一寸手はなしました。すると和尚は、又平氣でだまつて、ボク／＼と木履の音をさして、騒ぎも走りもせず

みました。私がうつとして居たら、その人は手が抜けて離しました。」と云ひました。扁也齋は「それ／＼、それが化物です。」と云ふと、和尚は「いゝえ、化物とか獣なら手が冷い筈ですが、私の頭を握んだ人の手は、中があた／＼かでした。若い人はとき／＼じょうだんをしますからね、あはは／＼。」と云ひましたので、扁也齋はその和尚のあちついた、一寸の間にも心をみださず、よくものを考へて、道理にあかるいのに感心してしまひました。それで成程劔道は體を鍛へるもので、禪道は心を鍛へるものだ、兩方とも人を鍛へるものだ

扁也齋もこれには驚きました。それで二三日してから、わざ／＼和尚の寺へ出かけて、「和尚様は毎夜、雄島へ坐禪にいらつしやるそうですが、あの道には化物が出ると云ふうわさがあります。そんなものに、まゝひになつた事はありませんか。」と云つてみました。すると和尚は「化物なんかは居ません。しかし、この村の若者が、じょうだんに或夜私の頭を松の木の上から擡

雲居和尚の弟子になりました。そして時々、和尚さんをおどかした時の事を考へて、おかしくなつて吹き出したり、和尚さんの落着て居て平氣なのに感心したりしました。(をほり)

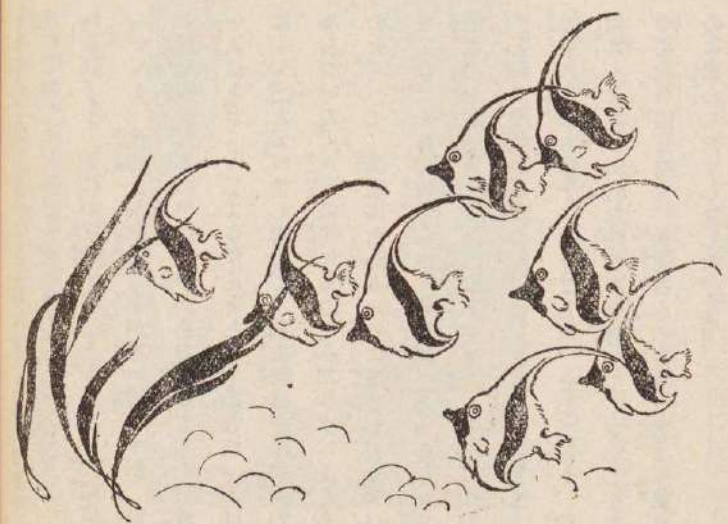
水の底

井本龍麿

海の底には  
何がある。  
珊瑚の林に  
金の魚  
銀のお宮に  
姫様が  
テンテンテマリを  
ついて居る。

河の中には  
何がある。  
一寸法師が  
水晶の

お針で  
砂をば  
ついて居る。





蛙

齋藤佐次郎

ひかし、或る村に大金持ちの百姓がありました。この家には、一平、二平、三平といふ三人の息子がありましたが、父親は早く死んだので、母親の手一つで育てられました。

しかし、今では三人とも立派な若者になりましたから、めい／＼お嫁さんを貰つて分家する年ごろでした。

産をみんなやつて了ふから。」といひました。

三人の息子は大喜びで、すぐ様お嫁さんを目付けに出かけました。

二

一平と二平の二人には、お嫁さんにならうといふ娘がちぎりに目付かりました。二人は、母親から受とつた麻を出して、すぐと娘に布を織つて貰ひました。

ところが、一番年下の三平には、どうしてもお嫁さんが目付かりませんでした。目付からない筈です。三年は極く無骨者で、これ迄村の娘たちと一度だつて口をきいた事が無かつたのですから。三平は村中を歩き廻りました。そして、娘にあふ度に「私のお嫁さんになつて下さいな。そして、麻布を織つておくんさいよ。」といひ乍ら、麻を

で、ある日の事、母親は三人の息子を呼んで、

「お前達は立派な若者だ。もうお嫁さんを貰つて家を持つていゝ年頃だと思ふよ。だが、私を安心させてくれる様なお嫁さんを目付けてくれなければいけない。私はお前たちの嫁になる人が、確りした女かどうか試す爲めに、こゝに麻を持つて来たから、めい／＼これを持つて行つて嫁にならうといふ娘が定つたら、布を織らせてごらん。一番立派に織つた織と嫁に擬した者には、この家の財

出しました。しかし、娘たちはみんな笑つて、誰も相手になりませんでした。

三平はがっかりして了つて、隣村へ行つて見ました。しかし、尚更目付からないので、いよ／＼がつかりしてふら／＼と歩いておりましたが、その内に大きな池の縁へ出ました。三平はそこまで来ると、疲れが出たのと、悲しくなつて来たのとで、あい／＼と泣き出しました。

と、ふいに三平の傍で、大きな水音がしました。何かと思つたら、一疋の蛙が池の中から岸へとび上つたのです。蛙は三平の傍へ来て、なぜ泣くのかと尋ねました。

三平はその譯を話しました。

「二人の兄貴はもういゝお嫁さんを探して麻布を持つて行つたが、私にはどうしても織つてくれる者が無いのです。」といつて、三平は泣きました。



蛙は大層氣の毒に思つて、

「ママそれで泣いてゐたのですか。それなら何でもありません。私にその麻をお渡しなさい。私が織つて上げますから。」と、いひました。

三平は非常に喜びました。そして、すぐ様懐から麻を出して蛙に渡しました。蛙はそれを受とるが早いか、池へ入つて了ひました。

三平はどうなる事かと案じながら暫くの間池の縁に坐つて居りましたが、その内に日が暮れたので、自分の村へ戻りました。

### 三

それから幾日かたちました。

母親は三人の息子を呼んで、「もう麻布が出来た頃だと思ふから、持つてお出で。」といひました。一平と二平は、すぐ様出て行つて、お嫁さん



それから母親は、また三人の息子に向つて、「麻布を織つてもらつたので、皆なが目付けたお

七〇  
になる筈の娘が織つた布を持つて来ました。

しかし、三平は困りました。蛙が織つてくれるといつたが、果して出来てゐるものかどうか、分らないので心配しながら、隣村の池のほとりへ出かけて行きました。そして、池の岸に坐つて、またい〜と泣きはじめました。

「ぼちやん！と水音がしました。

此間の蛙が池から出て来て三平の傍へ来ました。

「あなたの爲めに麻布を織つて置きました。さあ持つてゐらつしやい。」と、蛙がいひました。

三平はどんなに喜んで事せう。蛙から麻布をもらふと、飛やうにして母親の處へ行きました。

母親は蛙の織つた麻布を見ると、びつくりして、「こんなに立派に織つた布は見た事がないよ。三年のお嫁さんは中々偉い、一平と二平が持つて来た布とは比べものにならない。」と、いひました。

お嫁さんの事が少しは分つた。しかし、これだけではまだ本當の事が分らない。幸ひ、今度家で狎が三匹生れたから、一平も二平も三平も、めい〜一疋づ、娘さんの處へ持つて行きなさい。狎を一疋立派に育て上げる様なお嫁さんを探した者へこの家を次がせるから。」と、いひました。

そこで、一平と二平と三平は各々一疋づ、狎を抱へて、別々の方向へ出かけて行きました。

三平は何處へ狎を持つて行くといふ當もないので、何時もの池へ行きました。そして、また岸へ坐つてい〜泣きました。

「ぼちやん！と水音がしました。

すると、いつもの蛙が出て来て、

「なぜ泣くのです。」と、ききました。

「私は困つてゐるのです。誰の處へこの狎を持つて行つたらいいのかわからないから。」

と、三平がいひました。  
「それなら、その狎をお貸しなさい。立派に育てて上げますよ。」かういつて、蛙は心配そうにもちく／＼してゐる三平から狎を受取つて、池の中へ入つてしまひました。

四

いく日もくもたちましたある日の事、母親は息子達に渡した狎が、花嫁になる娘の手でどんなに育て上げられたか、早く見たいと言ひ出しました。一平と二平は直に家を出て行きました。そして、間もなく大きな狎を連れて歸つて來ました。しかし、二疋とも噛みつきさうな恐ろしい顔をしてゐて、人さへ見れば驚かひの顔



七二  
に吠えました。母親は犬を見たとけて、ぶる／＼と頭へて了ひました。  
三平は何時ものやうに池へ行きました。そして、蛙を呼びました。すると、蛙が出て來ました。そして、それはく可愛らしい小さな狎を三平に渡しました。狎はいろ／＼の面白い藝當をしました。する事がまるで人間の様に利口で、人のいふ事なら、何でも分りました。三平は無中になつて喜んで、母親の處へ狎をつれて行きました。母親は三平が持つて來た狎を見ると、驚いて「これは立派な狎だ。こんな利口な犬は見ただ事がない。三平や、お前は本當に世合せ者だよ。」  
母親の言葉を聞いて、三平はどんなにか困つた事とせう。一體三平はどこから花嫁をつれて來たらいゝのでせう。今度こそは、蛙が役に立ちそうもありませんでした。  
三平は困り切つて、首を垂れて、考へ込みながら歩きました。と、いつの間にか、池の傍へ來てしまひました。  
ぼちゃん！と水音がしたかと思ふと、いつもの蛙が三平の傍へ出て來ました。  
「何をまたそんなに考へ込んでゐるのです。」  
と、蛙がさゝましたから、三平は困つてゐる譯を話しました。  
「私をお嫁さんにしたらどうです。」  
と、蛙がいひました。三平は妙な事をいふものだと思ひがから、  
「蛙がどうして人間の嫁さんになれるのです。」

はい、お嫁さんを見つけたね」と、いひました。しかし、母親は未だ安心が出來ないと見えて、今度は倉の中から白い絹を三反出して來ました。そして、三人の息子にまた言ひますには、  
「こゝに絹が三反ある。これをめい／＼娘さんの處へ持つて行つて、着物を縫つて貰ひ。一番立派に縫つた娘を探がした者に、此の家のあとを取らせるから。」  
一平と二平と三平の三人は、急いで出かけて行きました。三平は今度も蛙に絹を縫つてもらひましたが、矢張り一番の上出來でした。  
母親も遂に安心したと見えて、  
「私はこれ以上たためす必要がない。三平のお嫁さんが一番しつかり者だ。三平や、お前はこれから直ぐに行つて、その娘をつれてお出で。私はすぐお嫁さんを迎へる仕度をするから。」といひました

と、尋ねました。

『あなたは、もう一度私に用を頼みたいと思ふのですか、それとも思はないのですか。』

と、蛙がさしました。

『頼みたい事は、頼みたいのですが、……』と三平がいふと、蛙はすぐ様見えなくなつて了ひました。と、程なく池の中から小さな〜お駕籠が現れました。そして、二疋の青蛙がそれを擔いで三平の傍までやつて來ました。

『さア、私も乗りますから、あなたもこれに乗んなさい。』と何時もの蛙が出て來ていひました。三平は、何かさつぱり分らない乍らも、いはれる通り小さな〜お駕籠に乗りました。

お駕籠は、どん〜と村の街道を歩きました。すると、向から三人の山伏が來ました。眞先の山伏は、駈着てした。二番目のは駈着てした。そして、ついで駈着てした。すると、二疋の青蛙は、二人の若者に變りました。そして、お駕籠に乗つてゐた蛙は、綺麗な、綺麗な娘になつて了ひました。

二番目の山伏は、金剛杖をもつて小さな小さなお駕籠を七遍た

たきました。すると、小

さな小さなお駕籠は、

立派な立派な大きな

お駕籠に變つて了ひ

ました。

三番目の山伏は、脊負

つゝた箱の中から大きな袋を出して、それに向つて何か唱へますと、袋の中が一抔お金になつてしまひました。



三番目の山伏は盲目でした。

三人の山伏は蛙がお駕籠をかついてゐるものですから、

『實にこいつは珍し。』

と言つて、アツハ、アツハ、アツハ……と堪へ切れない様に腹をかゝえて笑ひました。

あんまり笑つたものだから、駈着者の山伏は急に口がきける様になりました。駈着者の山伏は、足が立つて了ひました。盲目の山伏は、目が開いて了ひました。三人の山伏は、非常に喜んで、  
『これは蛙のお蔭だ。是非何かお禮をしてやなと、いひました。』

この山伏達は、丁度仙人の處へ行つて術を習つて來た歸り道なのでした。

最初の山伏は蛙の腹の上へ駈着てのせて、三番

として、それを三平にくれました。

三平と花嫁とは、山伏に幾度も〜お禮をいつ

て、二人の若者にお駕籠をかつがせ

ながら、母親の家へ急がせました。

母親は三平の花嫁さんを見ていよ

いよ驚きました。

『三平は、本當に仕合せ者だ、家の

跡取りだ。』

かういつて、母親は夢中になつてよ

ろこびました。

三平は遂に大きなお百姓の家の跡取りになりました。そして、美しい花嫁さんと一緒にそれは〜仕合せに暮しました。(をばり)

葱坊主

野口雨情

山から  
びーびー風が  
吹いた



昨日も今日も

畑に

吹いた

畑の中の

葱坊主

寒いな





## 小人の森

桶逸雄

昔、朝鮮のある町に、李彭といつて、大層まめめしく働く男がありました。李彭はほんとうに降つても照つても、毎日々々、せつくと働いてをりました。町の人は皆、李彭はよく働く男だといつて感心してをりました。ある朝、李彭が買物に出かけますと、人々は「李さん、どうしたのです。右の頬がひどく腫れてるぢやありませんか。」

と言つて、不思議さうに尋ねました。李彭はほんとか知らと思つて、右の頬へ手をあてて見ました。なるほどひどく腫れてるのでびつくりして、黙

物も買はずに、こそく家へ歸りました。

李彭は心のうちでは、明日の朝にでもなれば癒るだらうと思つてをりました。けれども、あくる朝になつても癒らないばかりか、ますます腫れてきました。そして、日がたつに従つてだん／＼腫れてきました。しまひには、頭と同じほどの大きさになりました。

それから、町の人々は李彭を見ると、面白がつてからかふやうになりました。

さうしてあるうちに、ある日、名高い醫者がこの町へ参りました。その醫者は、ふしぎな魔術を使つて、どん

な病氣でも癒すといふので大層な評判でした。

李彭はこれを聞いて、早速、醫者を訪ねて行きました。醫者は李彭の頬を見て、いろいろと考へてをりましたが、やがて顔をあけて、

「李さん、これは普通の病氣ぢやありませんよ。私の見たところでは、あなたは永い間何か悪い事をしてゐらつしたに異ひありません。さうでせう。かういふ病氣はどんな療法をしたつて癒るもんぢやありません。ですけれど、たつた一つこれを癒す方法があるのです。もしあなたが私にたんとお禮をしてくださるならその方法を教へてあげませ



かう醫者が言つたので、李彭は眞實になりました。李彭は永い間、晝間はよく働くやうに見せかけて、夜になるとこつそり盗賊の群に交つて、悪い事をして來たのでした。ですから、お禮はいくらでもいたしますから、どうか頬を癒す法を教へてくださいと言つて頼みました。

醫者はそれではと言つて、丁寧に教へました。

「こんど滿月の晩に、町はづれの森へ行つてごらん下さい。あそこには妙な木が一本あります。その木へ登つて暫く待つてゐると、どこからともなく大勢の小人どもがぞろ

ぞろやつて来ます。小人どもは人間を見つけたら、きつと踊つてくれといふでせう。そこで、もしあなたが上手に踊つて小人どもを喜ばしてやれば、あなたの脹れた頬を癒してくれます。だけど、もしあなたが下手に踊つたら、小人どもはおこつて、あなたのも一つの頬まで脹らしてしまふでせう。」

李彭が醫者に教へられてから、十日ばかりして満月の晩が暮りました。李彭は教へられた通り、町はずれの森へ行つて、その木に登つて、小人どもの来るのを待つてゐました。すると、どこからともなく大勢の小人どもがぞろ／＼やつて来ました。そして、木の下で輪になつて踊り出しました。李彭が珍らしさうに見てみると、一人の小人が李彭を見つけて、叫びました。

「おやこの木の上に誰かゐるぞ」  
「誰でもいゝから降りて来て踊れく」  
とまた一人が叫びました。

で、李彭はこは／＼木から降りて、小人どもの首領の前へ出て、言ひました。



次の満月の晩、今晚こそは立派に踊つて見せようと思ひながら、李彭は例の森へ出かけて行きました。と、いつの間によつて来たのか、小人どもはもう盛んに踊つてゐました。李彭はおそろ／＼首領の前へ出て、  
「こないだの満月の晩には、下手な踊をお目にかけたが、今晚は立派に踊つて見せますから、もう一度踊ら

八〇  
これを癒していたとかうと思つて参つたのでございませう。もし癒していたとけるものなら私はほんなにでも踊ります」

「おゝさうか、では早速踊れ。上手に踊つたら癒してやらう。だが、下手に踊つたら、も一つの頬も脹らしてやるぞ。さあ踊れ。」

小人の首領が、かう言ふと、大勢の小人どもは李彭の周圍をとり巻いて坐り直しました。

李彭は踊り出しました。だがあんまり一生懸命になつて踊つたので、しばらくして、ぱつたり地面へ倒れてしまひました。小人どもはおこつて、

「まづい踊り手だ。」  
「左の頬も脹らして歸れい。」

など、口々に罵りながら、どつかへ消えてしまひました。李彭は両方の頬を脹らして、泣きながら町へ歸つて来ました。すると、町の人々は前よりか一層面白がつて、ワイ／＼言つてからかひました。

李彭は大層くやしがりながら、次の満月の晩が来るのを待つてゐました。

して下さい。」  
と言つて、頼みました。小人どもは、何よりも人間の踊が好きなものですから、早速李彭に踊らせました。

李彭はこんどはおちついて踊りました。姉のうちはゆつくり踊つてゐましたが、だん／＼調子を早くして、終りに近づくにつれて、一層調子を早くして、それは／＼みごとに踊りました。

かうして李彭が踊を終へた頃には、小人どもはすつかり喜ばされて、酔つたやうになつてゐました。と、小人の首領が出て来て、

「やあどうも立派に踊つてくれた。ではその頬を癒してやらう。」

と言つたかと思ふと、もう小人どもの姿はどこにも見えませんでした。李彭はほんとうに癒つたのだらうかと思つて、両方の頬へ手をあてて見ましたが、ふしぎに癒つてゐましたので急に嬉しくなりました。

町へ歸ると、人々は驚いて、いろ／＼と尋ねて見ました。けれども、李彭は何も言ひませんでした。そして、それからまじめな人間になりました。(をはり)



ぬすんでたべた

鳥の嘴は  
三尺曲つた

鳥のねがひ

朝鮮京城旭町

西谷みのる

### 童謡

野口雨情選

いやしんぼ鳥

福島縣二本松町  
齋藤弘治

地藏さまのお手に  
赤い團子が一つ  
今日もあがつてるた

園子山寺の杉森の  
いやしんぼ鳥が目つけて

栗鼠

千葉県東葛飾郡分村  
渡邊知信

お家の屋根で  
鳥がないた  
綺麗なおべべ  
着たいとないた  
鳥のおべべ  
眞ッ黒々の  
たどんのおべべ

お山の鳥は  
寒い風が

たゞ龍巻の村いざが  
何んにも言はず覗いてた

サンタクロース

東京市牛込区矢来町  
山田邦臣

サンタクロースの

来る晩に

街にすらりと

灯がついた

赤い提灯

ぶうらぶら

青い提灯

ぶうらぶら

### 朝

京都市五條橋東

梅田安之

霜の木も杉も  
冬枯れの  
空につくねん立つてるた

坊やの家は餅搗きだ  
兎の家も餅搗きだ  
ほつたん ほつたん 餅搗きだ  
お正月さんどこから来る  
天狗の山の麓から  
天狗の山でも餅搗きだ  
ほつたん ほつたん 餅搗きだ

サンタクロースの  
小父さん  
あつちに、こつちに  
ぶうらぶら

### 童謡の選後に

野口雨情

童謡は、短い歌文ではありません。詩のうちでも一番優れた、一番たふとい國民詩であります。散文のやうに、冷たいものではありません。もつと温いものであります。事柄の説明は冷たくなり易いのです。理窟になると無邪氣さがなくなつて了ひます。温暖と無邪氣さが缺けて了へば、もう童謡の範圍ではありません。古くからうたはれてゐる童謡中にも盛れてゐるものほど野氣も調子も意味も、ばか／＼しい位無邪氣であります。うたつてみても讀んでみても懐しい滋味があります。私は、古い童謡をお真似なさいと云ふのはありません。参考として考へていただきたいのであります。

このたび皆さんの童謡を見ますに、私の考へてゐる童謡とは大變縁の遠い氣が致しました中には生活の常識を云つたり、主義運動を云つたり、童謡に一言大切な無邪氣と滋味を缺いたのが澤山ありました。生活でもない、人生でもない、主義でもない、運動でもない所に童謡の本質のれうちがあるのではありません。それからも、皆さんの童謡中には、同じ無邪氣と滋味も感じられてゐる童謡がありました。

彼へは「お月さん若いね」のやうに、同じ言葉を使い返すには、前後の意味や言葉の調子をよく／＼考へて、それがためにその童謡が生きて来るなら無論良いことですが、さうでない限りは餘程注意していただきたいです。齋藤弘治君の「いやしんぼ鳥」の「鳥の嘴は三尺曲つた」は理窟でない所に理窟でない面白味がありました。

臨募童謡はこれまで随分集りましたが、特に優れたのが見られなかつたので、發表することが出来ませんでした。が今後、野口雨情先生に見て貰つてそのうちから優れたのを一首か二首、本欄に掲げること致します。然しこんどのやうに、いゝのが澤山あれば、なるべく澤山出したと思ひます。ですから、月々の作品の出来ばえによつて、いろいろな形式で發表することになるでせう。



幼年詩 若山牧水選

靴(賞)

福島縣金遼小學校尋六 今泉仁藏

王様の靴は金の靴  
子供の靴は革の靴  
靴をむすんだ鈴の音が  
あーるくたびにチンカラカン。  
チンカラカンとなりひびく  
静、ちんからかんと此處まで聞えて参ります

雀(賞)

仙臺市定禪寺通樺町十三 天野貞三郎

カアラカラ  
風もないのにカアラカラ  
羽の音が鳴つてゐる  
水をゆすつたら  
チヨコッとながが音だして

お蔵の屋裡へ飛んでつた  
野、桐の木から、雀ちゆう、  
桐とお蔵の間の畑に、小犬がちよいと  
出てわん。

僕のないふ(賞)

竹村哲男

僕のないふ  
僕のないふが  
錆びました  
それで僕が、  
砥石でといで  
えんぴつつけづつて  
みました  
まへよりきれなく  
なりました

赤い鳥

劍路第四小學校尋四 坂本進一

赤い鳥赤い鳥  
お前は毎日庭に来て  
なぜそんなに悲しそに

綴方

ばくろさん(賞)

兵庫縣日吉川小學校尋四 土居忠

僕は市場へいった。大ぜいのばくろ  
がゐるた。

「まあ賢つておけ」  
「いやそんなにやすすくてうれれん」  
「うれ、うれ、うれといふのに」  
「そんならどれくらいだ」  
「これくらい」

といつて、たもとの中へ手をいれて、  
何かしてゐるたが

「いやそんな事は出来ない」  
「うつとけ」  
「いや」  
「二冊や三冊のそんなんだ、うれ」  
といつて、うらなない人の背をどんとひ

とはめてゐるた。それから二人はあちら  
へいつた。きつとつけてもらふのだから  
うと思つてかへりかけた。  
又一匹牛がきた。

ゆうべのおきやく様(賞)

朝鮮大邱小學校尋四 河内稔

「こんばんは」  
と、やさしいこゑでけんかんへ来たお  
ぢ様があつた。僕はいそいでちやのま  
へいつた。ちやのまにはもうねどこが  
とつてあつた。ねどこにはいつてどん  
なおぢ様かなあまだきいたことのない  
こゑだ、あたまをひねくつてかんがへ  
たがまだわからん。

「おかあさん、だれね——」  
「だまつておいで、やかましい」とし  
かられた。おしへてくれたらいいのに  
と思つてゐるた所へ、ちようどおかあさ  
んがおちやをだしにとをあげた。「しめ

どくたゝいた。そばから一人がきて  
「そんならこれだけ」  
とたもとの中へ手を入れた。そして  
「これくらいでうつておけ」

といふと、一方の人は少し考へてゐるた  
が、だまつてすすごあちらへいつた  
何をするのであらうと思つてついで  
ると、大ぜいのばくろのおる所へきて  
「あんな安い事をいふのだ、かなはん」  
といふと、一人の若者が  
「どれくらいにいふんだ」  
またたもとの中であつてゐるたが

「これではどうだ」  
「もう少しはりこめ」  
「うつとけ」  
「そんならうつとかう」  
といふか、いわないうちに、皆はばち  
ばち手をうつた。

「大きな牛だ」  
「こゝろやよい牛だ」  
だ。こんどは、と思つて思つてゐるた  
ひげががはのりようがはからあごひげ  
までもつづいてゐる。かほをおとうさ  
んとくらべると、おとうさんのはまる  
いかほで、おきやく様のはほそ長いな  
—と見てゐると戸をしめられた。まだ  
見せてもらつたらいいのにと思つたが  
だめだつた。話々の間からおとうさん  
の話に

「うちのほうも松浦さんのこともとな  
かよしで、この間もさい、あそびに  
いつたりこられたりした」と耳にはい  
つた。僕は松浦君のうちのとおとうさん  
はかんごくへ出る人だから、このおち  
様もかんごくへ出る人だらうと、思ひ  
／＼、もれてくる話をききながらねい  
つた。

大根はこび(賞)

福島二本松第一小學校尋四 加藤ハナ



お池の水を見てゐるの  
或日お池の鯉の子が  
赤い小鳥に問ひました  
わたしの大事の胸の毛を  
赤い赤い胸の毛を  
向うの山の鳥めに  
とられて斯うして居りますと  
泣いぢやくりして云ひました  
或日大雪まつしろに  
積つた朝に赤い鳥  
池に浮んで悲しそに  
屍となつてをりました  
評、誠に美しいお話です

雀

大阪 室山 禮二

お山にチユチユ  
雀のお家  
お堀の鏡で化粧して  
お水頂いて  
赤いお日様出ない内  
木犀の星根へ  
木犀の庭へ

木魂

北海道深川小學校第一  
唯是日出産

オーイと云ふたら  
オーイと云ふた  
お前はたれだ  
お前はたれだ  
何へん聞いても  
おんなじ返事  
おつかなピツクリ  
馬鹿と云ふて  
逃げた  
がんく渡れ  
京都府高津町宇島屋  
稲葉健之助  
お日さま西に、日は暮れた  
お月さんが東の空から  
顔出した。びか〜〜。  
あれ〜がんが。一羽二羽十羽。  
さほになつたり、かぎになつたり。  
お前のお國はどこ。

昨日は日曜で大そう暖でした。弟と  
私はお葦ころから大根はこびの手つだ  
いを一生懸命に汗を流してしました。  
お父さんが、強いなあとはめると、弟  
はい、氣になつて力もないのに大きい  
太つたのを兩方の手で差上げて、「ど  
もんだ」なんていばつてあるいてゐた  
その内につまづいたのか大根が頭の上  
にほたりとおちて頭の上が砂だらけに  
なりました。弟はべそをかいで大きな  
聲で「あゝいた、ああいたい」と泣き出  
しました。私は大根をそこへおいてお  
母さんのところにつれて行きました。  
母「何して泣てゐるのだい」  
私「あんまり大きな大根をあたまの上  
にあけて、それが頭へおちて泣いてゐ  
るのです」  
母「そうかい、坊は強いんだから泣く  
んじやないよ」  
と責めます。弟はよけいになだをこ  
んと囁りだしました。僕らは火じでは  
ないかと思つてすぐまどから見ますと  
南の方の空にけむりがしきりにあがつ  
てゐます。せいまいじよのきてきもプ  
ウ〜ふきだしました。僕らは「火じ  
火じ」と言ひながら、にかいをかけ下  
りて表へ出て見ると、人がたくさん走  
つてゐます。僕らもそれについて走り  
だしました。火じはたぶろきの方の家  
でした。たぶろきの橋を渡ると小さい  
道で、僕らは田の中を通つて行しまし  
た。行つて見ると、わら家のやねがも  
えてゐました。パチ〜と音をたてて  
けむりがたくさん出ます。ほんぶも、  
もう二つ来てゐました。たくさんの人  
の中には顔が黒くなつてゐる人もあり  
ました。こちらの方には僕がたくさん  
垂ねてありました。しばらくしてけい  
さつのじやうきほんぶも来ました。夕  
方になつて火がきえたので、みんなが

てね泣き出しました。お母さんは仕方  
なささうに弟をつれて、ふろばに行き  
ました。弟は頭から顔から手まできれ  
いに洗つていたよいてにこ〜として出  
て来ました。私は弟の分もはこんでし  
まつて、また畑へ行くとお父さんは  
「はなちやん御苦勞様。ごほうびに今  
度の日曜に、郡山へつれて行つてやら  
うなとおつしやつた。私は郡山へ行か  
れるかと思ふとうれしくてたまりませ  
んでした。もう夕方になつたので、冷  
めたい風が吹いて來ます。其の度にお  
隣の桐の葉ががさり〜とおちます。  
私は手を洗つてお家へはいました。  
きのふの火じ

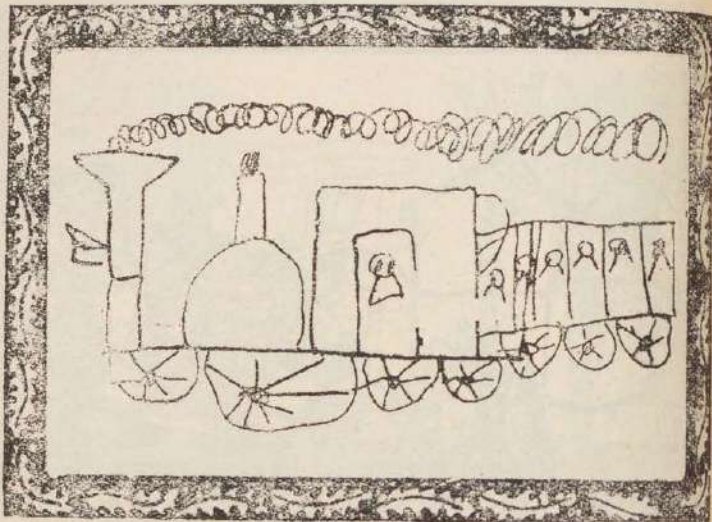
山口縣柳井小學校第三  
榎本 杉一

きのふ學校からかへつて、辻君のう  
ちの二かいで辻君や秋本君などと風本  
を見てゐると、ひの鬼のけねがマンが  
かへりました。かへる時、ほら〜い

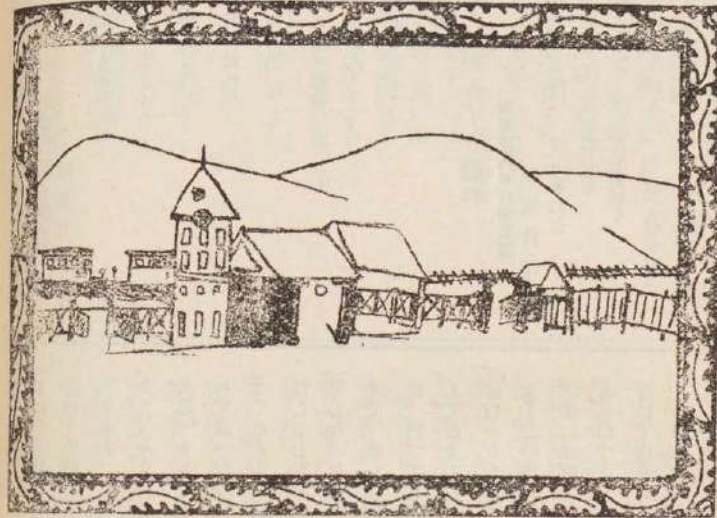
暴れ牛

朝鮮大邱公立小學校第五  
高田 勇

ひるごはんを食べてゐると、何だか  
裏が騒がしいので、出て見ると暴れ牛  
だ。左の角が折れて血まみれになつて  
ゐる。時々「うーん、」とうなつたり、  
「うもーう」とおそろしくいつたりする  
まはりには子供や大人が大勢集つてゐ  
る。道を通る人も時々立ち止つてその  
方を見る。一人の鮮人が何にも知らな  
いでそばへよらうとすると、牛は角を  
突出してうなつてつきかゝつた。アイ  
ゴウ。」といひながら後へさがると、丁  
度そこに溝があつてひつくりこけた。  
その素ぶりがをかしいので見物人がド



一 召子丸 一 尋校學小某縣野長 「車汽」 畫由自



稔内河 四尋校學小邱大鮮朝 (賞) 「場車停」 畫由自

子供等は面白さうに石をなげ出した。「うーう」と恐ろしくうなづて禁れ出す。つないである綱が切れさうに見える。あぶない〜と思つても誰もどうすることが出来ない。子をおぶつた人達はみんな逃げ出した。持主らしい人が棒でたよくと、「パタッ」と砂煙を立てながらこけた。この牛は一人の小さな子を突かうとして、ボブラの木をついて角を折つたといふことである。

妹と別れた日

大阪市鶴野小学校尋六  
赤尾 きみ子

忘れもしません一昨年六月の七日、丁度私の誕生日の翌日でした。私の一番末の妹が今臺灣にゐる伯父の所に養女に行くのでした。一家族揃つて神戸港にゆきました。妹のすま子は、母や、姉妹と別れるとは知らないでニコ〜笑つて居るのでした。私等はまだ妹はありますが、遠く海を隔てた臺灣へ行くすま子は、どんなに淋しいだららと思ふと、ひとりでに涙が出るのでした。やがて、臺灣へ行く備後丸はきました。しかし船が大きくて港まで来る事が出来ませんでした。櫻丸といふ汽船にのつて

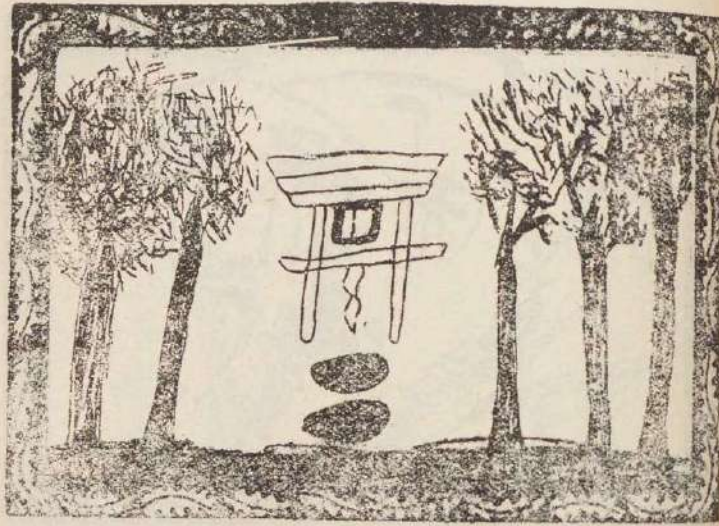
備後丸のそばまで行きました。

それから、備後丸の綱椰子を上つて、定められた船室へはいつて、ビスクケットなどをたべて居ると、船が出るといふので驚いて母は迎へに来てゐた伯母にすま子を渡して櫻丸に移りました。ふり返つて見ると、備後丸の甲板の上には、すま子を抱いた伯母様が、こちらを見てゐられた。これが別れかと思ふと、私は悲しくなつて延び上りながら見ると、何もしらないすま子はニコ〜笑つてゐた。それから家へかへりましたが、すま子の顔が思ひ出されて、何をしてほんやりとして、手につかなかつた。

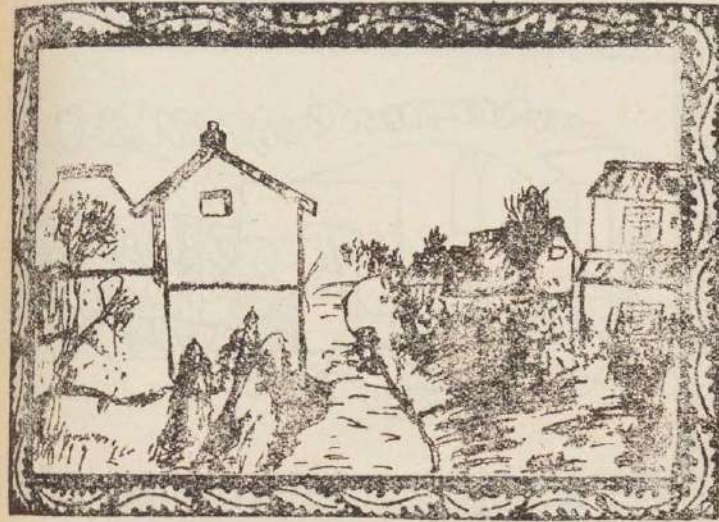
ままごと

福島縣二本松小学校尋四  
今泉 シヅ

日向のよいものおきの前で、國松さんと春藏さんが豆打をしてゐます。私と妹とままごとをしやうと思つて、豆打をしてゐるわきにござをして、ままごとを初めました。今お母さんにもらつて来たびすけつとをくづつてごはんにしました。そこに熊猫が来ました。お晝になつたので、今にごはんを食べやうと思つて戸だなの皿を出



子 幸 關 四尊校學小田依縣野長 「居 鳥」 畫由白



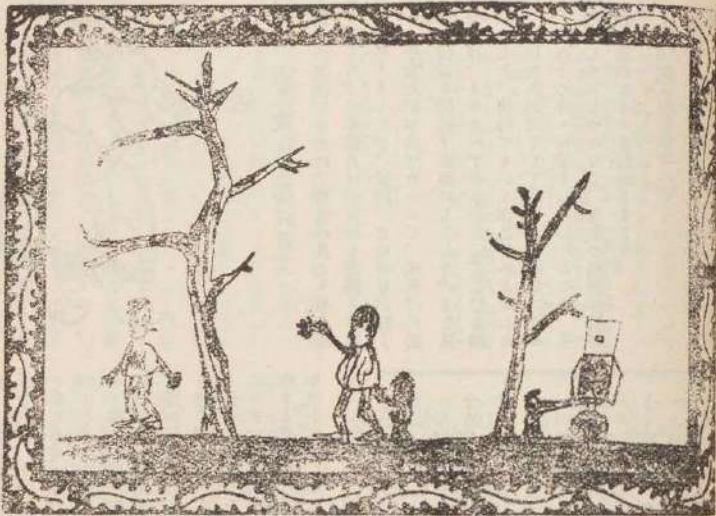
正 守 田 依 校學小田縣東縣野長 「景風の舎田」 畫由白

ツタ。二組が走りグシタ。一等ハ中尾正吾君デアツタ。  
 二等ハ淺川元君ダツタ。三等ハ一組ノ人ダツタ。五組ガ  
 カクダシタ。一等ハ島山大助君デアツタ。二等ハ一組ノ人  
 ダツタ。三等ハ村瀬正信君デアツタ。ソレデ一年ノ男子  
 ノ競走ハスング。三男ノ一等ハ板谷サンデアツタ。四年  
 ノ一等ハ早カツタ。二等ハ横田サンデアツタ。一年ノバ  
 スタットボールニナツタ。一組ガ赤ニナツタボクノホウ  
 ハ白ニナツタ。ミンナ、イツシヤウケンメイニナツチ、  
 ホツチキタ。シバラクシテ、先生ガヤメイトオツシヤツ  
 タ。一組デハ、馬場先生ガマリチカゾヘテ、二組デハ、島  
 田先生ガカゾヘテ。一組ハ二十三アツタ。二組ハ四十五  
 マリガハイツタ。島田先生ハ、決勝點デツケテイラツシ  
 ヤツタ。先生ノ徒歩競走デハ、渡邊先生ガ一等ヲオトリ  
 ニナツタ。關根先生ト阿部先生ハ二等ヲオトリニナツタ  
 鶴田先生ハ三等ヲオトリニナツタ。校長先生ハビリダツ  
 タ。ソノウチニミンナガカヘリ出シタ。  
 □佳作 △除夜の鐘 長野 成田基真△冬の朝 千葉 岡村守△  
 津橋に響くまで 朝群 市川澄子△坊主はぐり 朝群 釜瀬虎雄  
 △僕のちよつき 大阪 佐藤忠△このあひだのひつこし 山口  
 津田文江△これ 山口 藤井智恵子△もち 福島 小瀬トリス  
 兄會 朝群 小瀬川美恵(以下通信欄)

運 動 會

東京府大同小學校 敬 喜

ボクハ運動會ノ日ハ、風ナヒイテキタカラ出ナカツタ。  
 シカシ、運動會ハミエイツタ。島田先生ガ一年ノ競走ダ  
 トオツシヤツタ。第一組ガ走り出シタ。一等ハ一組ノ人  
 ダツタ。二等ハ佐藤長一君デアツタ。三等ハ一組ノ人ダ  
 ツタ。二組ガ走りグシタ。一等ハ中尾正吾君デアツタ。  
 二等ハ淺川元君ダツタ。三等ハ一組ノ人ダツタ。五組ガ  
 カクダシタ。一等ハ島山大助君デアツタ。二等ハ一組ノ人  
 ダツタ。三等ハ村瀬正信君デアツタ。ソレデ一年ノ男子  
 ノ競走ハスング。三男ノ一等ハ板谷サンデアツタ。四年  
 ノ一等ハ早カツタ。二等ハ横田サンデアツタ。一年ノバ  
 スタットボールニナツタ。一組ガ赤ニナツタボクノホウ  
 ハ白ニナツタ。ミンナ、イツシヤウケンメイニナツチ、  
 ホツチキタ。シバラクシテ、先生ガヤメイトオツシヤツ  
 タ。一組デハ、馬場先生ガマリチカゾヘテ、二組デハ、島  
 田先生ガカゾヘテ。一組ハ二十三アツタ。二組ハ四十五  
 マリガハイツタ。島田先生ハ、決勝點デツケテイラツシ  
 ヤツタ。先生ノ徒歩競走デハ、渡邊先生ガ一等ヲオトリ  
 ニナツタ。關根先生ト阿部先生ハ二等ヲオトリニナツタ  
 鶴田先生ハ三等ヲオトリニナツタ。校長先生ハビリダツ  
 タ。ソノウチニミンナガカヘリ出シタ。  
 して見るとからでした。きつと熊が食べたのだからと思  
 つてさがして見ると豆がらの影にねむつてゐました。い  
 つもきかんほの妹はおこつて、眠つてゐる熊をぶちまし  
 た。熊はびつくりして「ニヤア」といつて逃げて行つてし  
 まひました。又ごはんをつくつてゐると、こんどはおき  
 せが来て「まねかい」と言つたので妹は「まぜつから」と  
 言ひました。おきせは「おらいは砂糖屋ない」と言ひまし  
 た。それでおきせの方は砂糖屋になりました。今日はに  
 づけ物をするので、妹が砂糖を買ひに行きました。「砂糖  
 一貫目くださいよ」と妹が言ふと、砂糖屋で「はい」と言  
 ひながら一貫目よこしました。そこで今日のにづけ物も  
 出来ました。ごはんを食べてしまふと、すぐ電氣がつい  
 たのでおほいそぎでままとの道具をかたづけました。



近藤義人 長野縣野小石學校四尋 自由畫「枯木」

往來では、云々さん、自動車、自働車、水車、學生、巡査、小僧、坊さん、異人さん、なんでも畫になります。  
 風を揚げる處、羽根をついてる處、歌留多をとつて居る處、泣いて居る處、笑つて居る處、みんな畫になりますよ。蟹を釣つたり、とんぼを釣つたり、竿で鯛を釣つたり、賽を空氣銃で釣つたり、猫に犬をけしかけたり、蛇を捕へて殺したりする處だつて、描けばずるぶら面白いでせう。  
 茶碗、土びん、手袋、帽子、果物、野菜、靴、襪、ミット、水筒なんかも描けばずるぶら面白いでせう。  
 描き絵（なんでも）——君達の身のまはりにある物、又は日々見たり聞いた事、自由勝手に描いて見せて下さい。  
 藤信八君は、「三枚のつづきはまづいが送りましたから直してごつしにのせて下さい」といふ手紙でしたが、直してごつしにのせてもらはうと思つてはいけませんよ。僕はいつての當選畫も一と筆だつて直しやしませんよ。  
 三枚のうちでは君の畫が一番面白いです。柳澤君のはお手本で覺えたやうに帽子と靴とが組合せてあるので、真くないし、佐藤君のは雑踏の畫かなんかの真似じやないですかね、君達は鉛筆で下描して、其上を墨でなすつて居ますね。あれはおよしなさい。いきなり墨なり鉛筆なりで、はつきりとお描きなさい。(完)



太田光雄 長野縣野小川神學校五尋 自由畫「猿跳」

今度はずるぶら湖山に畫が焼りましたが、真い畫が少かつたので、山本先生はがっかりして居ますよ。此次には僕のいふ事をよくのみにんで、真い畫をどつきり送つて下さい。  
 山本先生の一番癖ひな畫は、お手本の畫や、雑踏の畫を真似したり、人に教へてもらつたりしてかいた畫であります。  
 それから、物をはつきりと描まずに、うすばんやり描いたものです。鉛筆の尖をほそく削つて描かずに、尖の太い鉛筆ではつきりとお描きなさい。鉛筆はBか4Bだと濃く描けます。  
 濃く描ける鉛筆がなかつたら、墨でお描きなさい。墨で形を描いて水繪の具で色をつけて御覧なさい。  
 とにかく君達は、君達の眼で見た實際を描かなければいけません。さうするとだん／＼真い畫が描けるやうになるのです。  
 雪の降る日には、雪の色を描いて御覧なさい。  
 雨が降つたら雨の景色、風が吹く日には風の吹いて居る景色を描いて御覧なさい。  
 梅の花や藤の花が吹いたら、花を描いたり、お花見の處を描いたりするんです。桃や梅がなつたら桃や梅を描くんです。  
 お餅餅がさがされたら、お餅餅を描くんです。摘草にいつたら摘草の右様を描くんです。  
 汽車を見たら汽車をお描きなさい。  
 動物園へいつたら、熊や、狼や、鳥や、虎や、猿や、猪や、カメや

第三回應募畫評

山本 鼎



選 標

○應募童話童謡に就て

前月は多忙なゆゑは、普通毎月より早く締め切りました。その爲めに、童話も童謡も非常に薄山集りましたが、童話の方は時日が無くして一々慎重な選が出来ないので、来月号に於てその結果を發表する事にしました。また童話の方は、とりあへず井水氏の「水の底」を推奨しました。尚他にもいい作品はありました。野口先生が選して下さる事になつたので、全部その方へお送りしましたところ、早速選をして下さつたので、先生の細密な批評と共に優れたものを發表しました。

○綴方を讀んで

今月は非常に新鮮なといふ作が得られました

た。「はくろまん」「ゆらべのお客船」「大規模はこび」——何れも本當によい綴方でした。よくまとまつてゐて、缺點の少い作はいつも澤山にありますが、はつきり物を見て、生き生きと書いた作は少いのです。私は「はくろまん」を讀んで非常に感心しました。少年少女諸君が持つてゐる「天分」をそのまゝ、いつはり無く働かせたら、これ位な作が出来るとかと思つて感心したので、文學をなまはんかにかちつた青年などには、とてもこれ程生き生きと書く事は出来ないてせう。

本誌主催の「青い鳥」に就て

本誌主催の「青い鳥」に就て。前回は「青い鳥」の「青い鳥」といへば、誰でも知つてゐる位、世界的に有名な芝居なので、日本でも幾度かこの劇をやらうと企てられたが、結局に費用がかかり過ぎて、何時も中断してゐた。所が、今度はからずも、東京府の野

田村君が、この劇を上演する事になり、是非觀者の方少年少女諸君に此の芝居をお見せしたいと思ひ、氏來座とはかり、特に童行として二日間演ずる事にいたしました。皆さん是非觀覧ひ合して、この芝居を御覧なさいまし。きつと、こんなに面白い芝居があるのかと驚かれるに相違ありません。

○誌友の雜誌代改正

雑誌に第五号目を出しました。そして、他に比類のない立派な童話童謡雜誌になれた積りで、一月號以後は附録を附けたり、紙をよくしたりしたので、止むを得ず定額の改正をして、一冊貳十五錢になつてをります。誌友の方に、けことにお氣の毒ですが、一月以後の雑誌代は次の通り改正いたしましたから、どうぞ御承知下さい。そして、不足分だけを御持込み願ひ度うございます。今後はまず一冊誌を立派なものにして参ります。△三ヶ月分金六十七錢△半年分金壹圓卅四錢△一

年分金貳圓六十錢

「金の船」の残本についてお尋ねの方がありましたが、創刊號から毎月、いくらかづつ残つてゐますから、御希望の方は、キヤンパノ社へ宛申込んで下さい。

- 幼年時佳作 △○○○ 藤島 佐藤庄留
- 「金の船」誌友
- 前號 〇山口 柳岡キミエ君 〇山口 松浦サエ 〇山口 鶴岡大助 〇東京 島田英之助 〇埼玉 杉山定三郎 〇福島 鈴木ハツ 〇福島 佐藤芳雄 〇北海道 西木幸子君 〇福島 藤枝義雄 〇愛知 近藤八萬二 〇新潟 藤木前治 〇臺北 並川定謙 〇横濱 芳賀秀雄 〇京都 梅田定三 〇東京 野藤子 〇盛岡 田中正 〇兵庫 高見小三太 〇新潟 羽賀孝三 〇埼玉 小鳥の鳴會 〇愛媛 貞木清子 〇東京 山藤徳治 〇東京 田付文子 〇奈良 西岡美子 〇仙臺 藤木碧 〇京都 山村民男 〇東京 内良治 〇山梨 大木清 〇静岡 武岡次代 〇北海道 村田信次 〇山口 木村茂 〇福岡 奥村すみ 〇長崎 松水ナツ子 〇島根 山中一夫 〇福井 大田剛 〇兵庫 勝山義彦 〇滋賀 西田克巳 〇三重 山川清 〇山形 島村勲 (以下次號)

るといふ大人びた、いや味が少しもありませんでした。一體終りの句の「又一匹牛が来た」など中々氣がきいてゐる書き方でした。「はくろまん」を見ても解る通り、綴方の本當の妙味はみなさんが、見た通り、思つた通りを少しも偽らず書く時に出来たのです。本當に解の解る童家が子供の自山畫を見て、「こんなに立派な童話が子供に描けるのか、これは自分より巧い」といつて、感心する體に私共も皆さんの綴方を見て、解らない作らも同じ驚きを感じるのです。處が、中には折角いふ作であるのに、大人の筆が加つて、こわして丁つてゐる様なものを澤山に見受けます。そのいふものに限つて、實によくまとまつて手落ちなく書かれてゐますが、本當の味ひが無くなつてゐます。各地の學校から送つて來る綴方は、先生が綴方に熱心であつて、また中々解つてゐる方であると見えて、何れもよくまとまつた缺點の少い作ばかりです。しかし、そのいふのに限つてどこか先生が筆を加へたのではないかと思はれる點があつて、折角少年少女諸君が持つてゐる鮮い藝術が影をひそめて了つてゐるのです。こゝをよく考へていただいて、子供の綴方を指摘せられる先生方は、彼等の持つてゐる「天才」と覺んで、

子供の自由畫を募る

山本 鼎

子供諸君、——こんど、この雑誌で君たちの畫をいたゞいて、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月六つぐらゐる此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雑誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちはお手本や、雑誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらん下さい。

お手本を見て描いたり、雑誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ。それから、あんまり、うすく、ほんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雑誌へは出されません。そのかはり、そんないゝ畫は僕が戴いてだいにしまつておきます。

大人諸君、——以上の金を御賛成下さい。子供達は、本来、お手本を真似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出来るだけ、良質の畫用品を與へて下さい。そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さい。大人に、智、慧、感、情がある如く、小供にも智、慧、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然から、筆に現へられた、そのものです。

少年少女の創作募集

(原稿は東京府下田端三五一番地) (金の船編輯部へ送つて下さい)

自由畫

自由畫のことは、山本鼎先生か、前頁に書いて下さつたから、ごらん下さい。

綴方

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、そのまゝ、ふだん遺つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩

幼年詩は山なり森なり花なり何でも見たり、感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

- 自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に書いて下さい。
- 自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に書いて下さい。
- 幼年詩は用紙も字数も、みなさんの自由です。しかし、解りやすい様に墨かインクで書いて下さい。
- 住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。
- 人のものを真似たり雑誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。
- よく出来たのは、雑誌にのせます、中でも優れたものには賞品をさしあげます。

◎童話童謡募集

吾々はかくれたる童話、童謡作家を紹介したいが爲めに、毎月童話童謡を募集いたします。題材は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に從來の型を破つた、眞に藝術的な作品を求めます。

原稿の枚数は、童話の場合には十行、童謡の場合には八行以内、童謡の場合には五行以内、優秀な作品は誌上に掲載し、且謝金送料を差上げます。選者は、山口雨情先生、童話は當分の内編輯部でいたします。

◎金の船誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろ／＼の便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯部宛にお申込み下さい。すぐお知らせいたします。

○編輯部は移轉いたしました

- 定価一冊貳拾五錢 送料壹錢
  - 三ヶ月分三冊(送料共)七拾五錢
  - 半年 分六冊(送料共)壹圓五拾錢
  - 壹ヶ年分十二冊(送料共)貳圓九拾錢
  - 振替口座東京〇五七貳番
- 廣告料は御照會次第お答へいたします
- ▽御注文は必ず前金で御拂込下さい
  - ▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷
  - ▽切手代用は(愛錢切手)一割増に願ひます
  - ▽御注文の場合は如何登壇何誌よりと云ふことを明瞭に書いて下さい
  - ▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正九年三月五日印刷納本(毎月一回) 大正九年三月一日發行

編輯人 齋藤 佐次郎  
 發行人 横山 壽萬  
 印刷人 高橋 郁  
 印刷所 東京府東區南町二十五番地 三協印刷株式會社  
 東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地  
 發行所 キンノツノ社

大正八年十月十六日 大正九年二月五日印 第一冊 本  
（第三種郵便物認可） 大正九年三月一日發行（毎月一冊二日發行）

西村アヤ子著

# 童話ピノチヨ

近刊

紀州の新宮の町に、洋畫家を父として生れたアヤ子さんは、未だほんの十二歳で、小學校の尋常五年生ですが、實に驚くべき天才です。「ピノチヨ」はこの幼い著者が、あやつり人形の一生を書いた、それはく面白長篇童話で、挿畫から本の装訂まで、凡て一人で作り上げたものです。しかも、その童話は今の一流の大家でさへ、到底これ程生きくと思はれる程巧みなもので、その「自由畫」ともいふべき挿畫は、山本鼎さんを感心させた程立派なものでした。

「ピノチヨ」が出版されたら、世間の人はどんなにか驚く事でせう。童話の大好きな皆さんは勿論の事、お母さんも、お父さんも、學校の先生も、文士も、藝術家も、是非一度は読んで見なければならぬ本です。二月の半頃出版されます。

□ □ 東京 板橋 二七五〇三 社 ノツノンキ 町 麹 京 東 □ □

行 發 社 ノツノンキ 京 東